
幼馴染と図書室

篠宮 楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼馴染と図書室

【Nコード】

N4863Y

【作者名】

篠宮 楓

【あらすじ】

三つ編みおさげでガリ勉スタイルを貫く図書委員長と、臨時で来た幼馴染みな司書教諭の、恋愛のお話。こたろーがへたれです。へたれすぎてすみません！あれ、なんかシリアスになってきた……？

1 図書室にて

「本ばっか読んで、目、悪くするよ」

図書室に入って壁伝いに右手、奥。

唯でさえ来る人が少ない図書室の、これまた人気の無い貸し出し禁止本エリアの、もっと奥。

たった一つだけある机と、椅子二脚。

幾つもの本棚に隠れた、私の特等席。

今日も今日とて本の虫を自負する私は、世界から隔離されたようなその場所で、お気に入りの本のページを繰る。

昔懐かしガリ勉の、イメージを地で行く三つ編みおさげの図書委員長である私にとって、これ以上の至福の時間があるだろうか。

いや、無い。

2

真横の窓に濃いオレンジに変わりゆく風景を従え、机に開くは古事記の分厚い本。

ぺらりと捲れば、ぱっと見全く意味の分からない文字の羅列。

暗号のような文字達をゆっくりと紐解いて、意味を成して行くこの興奮。

今まで、分かち合えた人はいない……。

「……」

ちょっと暗くなっただけ、いいの！ 気にしない！

いつか、きっと、会える、かもしれないかもしれな……↑無限ループ

「ねー、比奈ってばさ。思いつきり俺を無視してるの、気付いてるー?」

デートは国会図書館、休日は国立民族博物館、ああ城跡巡りも最高ね。

「比奈あ、お前さー」

寺社仏閣に行くときは、朱印帳はマストだからよろしく!

ほくほくと幸せ妄想に浸っていたら、見ていた本の上にそれなりに大きな音をさせて掌がどんつと降りてきた。

「……」

思わず、その手を見る。

あー、骨ばった手ってある意味羨ましいよねー。

私、子供っぽいまんまだもんねえ。

「おい、比奈。いい加減こつち向け」

前の方から聞こえていた声が、いつの間にやら真横上方から降ってきた。

「手、邪魔。本が可哀想でしょ?」

顔をあげることさえ億劫で、本の上に置かれた手を丸めた拳でノックの様に軽く叩く。

「お前に無視されてる俺より、本の方が可哀想なのかよ」

「うん」

「即答だし」

はああ、と深く息を吐き出して真横に立つデカイ図体が、肩を落とした。 ような気がする。

しつこいけど、私の興味は本だから！

「比奈あ。お前、図書委員長の癖して、司書に対しての態度悪すぎー。減点したるか？ 内申点」

「こたろーちゃんと違って、数点の差に泣かないから」

冷たく返せば、余計なお世話だと小突かれた。

「まあいいや。でさ、比奈……」

そこまでこたろーちゃんが言い掛けた時、

「梶原先生、よろしいですか？」

少し離れたところから甘い声がトンデキマシタ。

いや、マジで。

比喩じゃなく。

まるで砂糖でコーティングされて、重みを増したかのような甘ったるい声。

顔を上げれば、ふんわりゆるパーマの髪が胸元でゆれる、もう一人の司書教諭が私達を見ていた。

こたろーちゃんは本についていた手を上げて、屈めていただろう上体を戻す。

「伊藤先生、何でしょうか」

一瞬にして「先生」に戻ったこたろーちゃんは、歩きながら何か思い出したようにこちらに振り向いた。

「三嶋さん。司書としては嬉しいけど、あまり根を詰めないようにね？」

その目は言葉とは裏腹で、わかってんだろーなあ、と二重音声に聞こえてしまうのは仕方ないことだろう。

「分かりました、梶原先生。お気遣いありがとうございます」
丁寧な生徒モードで御礼を言えば、満足した顔で伊藤先生と連れだつて歩いていった。

その広い背中を見送つて、私は再び本に目を落とす。
なんとなくもやもやするけれど、きっとそれは気のせいだ！
そう断言して、再び古事記の世界へ……

「今日もやるねえ、ちーちゃんは」

「んあ！」

入れなかった（涙
いきなり背中にどすんと重みが来て、本の上に顔面着地。

好きだけどね、本、大好きだけどね？
ファーストキスはね、せめて人がいいと思うの。

一向にどく気配のない背中の中判ザメを、振り落とす感じで体を揺する。

「あら、冷たい。副委員長は大切にされた方がいいですよー、委員長さま」

「その前に委員長の私を大切にせよ、河田佳苗副委員長」
冷たく言い放ちながら、本を撫でる。

シワになってないかしら！

佳苗は本マニアーと、私をけなしながら机の向こう側、もう一つある椅子に腰掛けた。

「ちーちゃん、あからさま過ぎて笑えるね。梶原せんせーも、いい迷惑だろうに」

にやにやと笑いながら、ふ、と落としたトーンで言葉を続ける。

「あんながつがつ感みせられたら、引くよねー。ていうか、うちらがドン引き。やだなー今日の戸締まり役」

本を撫でていた私は、佳苗のその言葉ににんまりとした笑みを向けた。

「そりゃ、ご愁傷様。どっちかが帰っていればいいねえ」

図書室の鍵は、司書教諭に戻すことが決まりなんだけど、実はそれが問題。

うちには、司書教諭が二人いる。

伊藤 千恵先生、御歳二十五歳と、梶原 小太郎先生、御歳二十二歳。

まあ、さっきのやり取り読んでくれば分かんと思うんだけど、伊藤先生は梶原先生LOVEでして。

まあ、梶原先生は臨時教諭だからその間に！ て、押せ押せ感半端ないわけでして。

んで、司書教諭は当たり前だけど図書準備室に二人でいるわけですよ。

鍵返しに行くと、そんな生々しいやり取りを見なきゃいけないから皆嫌がるのだ。

で、どうして私に回ってくるって？

「本当に嫌なんだよねえ。幼馴染の”こたろーちゃん”に、比奈から返してくれないかなー」

こーいうことだからですヨ。

たまたま話していたのを、佳苗に盗み聞き（いや、図書室で晩御飯

の話をした私達がバカなんだけど）されて幼馴染である事がばれたのだ。

内緒にしていたのに。

私は本のページをぺらりと捲ると、期待に満ちた佳苗を一刀両断する。

「幼馴染でも、今は単なる先生と生徒。役目は全うしてください」

「えー、幼馴染って事は内緒にしてあげるからさあ」

「それは当たり前。でも、嫌」

即答すれば、ケチと肩を落とされた。

1 図書室にて（後書き）

前に書いたものを、手直しして載せてみました。
お暇つぶしに……

2 蛇足・図書室にて ことろー

「本ばっか読んで、目、悪くするよ」

声を掛けても、比奈は振り向かない。

図書室に入って壁伝いに右手、奥。

唯でさえ来る人が少ない図書室の、これまた人気の無い貸し出し禁止本エリアの、もっと奥。

たった一つだけある机と、椅子二脚。

そこにいつも陣取るのは、俺の最愛の幼馴染。

長い髪を三つ編みにして、きつちり丈の制服スカート。

高校指定のカーデに、顔を上げれば見る事ができるだろう濃いブルーのフレームメガネ。

冗談か？ と突っ込みを入れたくなるほど一昔前のガリ勉スタイルを貫く彼女は、図書委員長の三嶋比奈。

高校三年の彼女が十二月に入ったこの時期、受験勉強以外でここにいる事は周りから見たら奇異の範疇かもしれない。

けれど彼女は既に推薦入試を終えていて、合格しているのだ。

故に、不思議は無い。

これは比奈にも確認したし、彼女の担任にも確認済みだから間違いない。

幼馴染って言うのを隠して聞き出すのに、すんごい苦労した。

担任がおどおどしながら言い難そうにしていたのは、きつと個人情報保護とか脳裏に浮かんだったんだろうな。

俺、九月から来年三月までの契約で来た、臨時採用の司書教諭だから信用とか余り無いだろうし。

しかし比奈ってば、幼馴染だつてばらすのなんで嫌がるかな。
俺としては公言して、比奈に悪い虫がつかないように牽制したいんだけどね。

何の為に、ここの臨探に応募したと思ってるんだ。まったく。

そんなことを考えながら、目の前で本を読みふける比奈を見つめる。
比奈が誰にも邪魔されないようにこの場所に来るのは、俺にとって好都合でして。

教師と生徒という態度を貫く比奈に、唯一幼馴染として接する事が出来る場所なのだ。

しかし、全く振り向きもしねーな。

俺の声をあっさり無視して大好きな本に没頭している比奈の姿も可愛いけれど、そろそろ声を聞かせてもらいたいわけで。

まん前に立って、のほほんとした声で話しかける。

「ねー、比奈ってばさ。思いっきり俺を無視してるの、気付いてる
ー？」

「……」

返答無し。

こいつの集中力は半端無い、が、きっと今は脳内トリップ真っ最中なんだろう。

小さく息をついて、ゆっくりと横に回りこむ。

古事記を読んでいるらしい彼女の手元には、大学ノートと筆記具。司書教諭をやってはいるが、自分の専門は中世文学ゆえに古事記なんて全く読めない。

これ読むくらいなら、外国語の翻訳をしたほうが楽な気がする。

ああしっかし可愛いなー、三つ編みで目を伏せてるから白い頂が丸見えなのよー、比奈ちゃんてば。

さすがに校舎内でどうこうすつもりはないし、それ以上に簡単に比奈に手を出すつもりもない。

気持ちはあるけどね。

え、あってもダメ？

それは許そうよー、ねえ？

好きな子が目の前にいりゃあ、触りたいし抱きしめた……あ、これ以上の想像はやめよう。

大変な事になる（涙

まあでも流石に、十八歳女子高生に二十二歳……もうすぐ二十三歳の男があっさり手を出しちゃうかんでしょう。

それにあの顔で拒絶されたら、へこむわ。

と言うことで、今日も今日とて梶原小太郎二十二歳、最愛の幼馴染に無視され中でございますー！

3 帰宅、そして自宅リビングにて

「口先か、お前の言葉は口先おんりーか！」

「煩いなあ、こたろーちゃんてば」

まったくこたろーちゃんの言う事を聞くつもりが無かったのはその通りなんだけど、それ以上に副委員長に嵌められたんだってー。

鍵当番を私になすりつけようとした佳苗が、諦めてカウンターに戻っていつて。

本に夢中になって、ふと気がついたのが最終下校の鐘だった。

「びっくりー」

とか、ふざけながら本を片付けてカウンターに行ってみれば。

――鍵よろしく！

という、置き手紙が。

orz、これを体現してしまったよ。

くそう、やられた！

上手い具合に、鍵を押し付けられた！

まだくどくどと、隣で文句を言ってるこたろーちゃんの言葉をスルースキル全開にして流していたら、自宅の前で立ち話をしている母親と隣のおばさんがこっちに気がついて声を上げた。

「あら、小太郎くん。比奈を送ってくれたの？」

「春香さん、こんばんはー。かーさん、ただいまー」

「おかえり、こた。今から春ちゃんちでご飯にするけど、あんた来る？」

「行かなきゃ、俺の飯はどーなるんだ」

「カップな麺が、お前を待っている」

「さいてー」

呆れたように肩を竦めると、こたろーちゃんは自分ちに入っていた。

また、後で。と、いい残して。

私は母親とこたろーちゃんのお母さんに挨拶しながら、その隣の家に入る。

そう。

自宅の隣が、こたろーちゃんちで。

五歳差の私達は、なぜか幼馴染で同じ学校にいる。

手を洗ってから自分の部屋に入って、制服から部屋着に着替えた。

コottonの半袖ロングワンピース。

下には、シヨートパンツを穿く。

一応、こたろーちゃんが来るなら、普通の格好をしていなければなるまい。

ああ、面倒。

鞆の中から課題を取り出して机に置くと、階下から呼ばれたタイミングで階段を降りた。

リビングダイニングには、こたろーちゃんのお母さんである奈津さんがダイニングテーブルについていた。

「比奈ちゃん、お疲れ様。今日は餃子だった」

箸でも叩いて喜びそうなくらい、嬉しそうな顔に思わず笑ってしま

う。

「奈津さん、ビール？」

後ろを通り過ぎながら声を掛けると、もちろん、と答えが返ってきた。

「奈津、あんまり飲みすぎちゃダメよ」

キッチンでは母親である春香が奈津にそう声を掛けながら、フライパンで餃子を焼いているところだった。

冷蔵庫からビールを二本取り出して、ついでに麦茶も手に取る。

「あら？ 小太郎くんも今日飲むの？」

目ざとく私の手の中のものを見た母親が、不思議そうに問いかけてきた。

「……多分」

聞いてないから分からないけど、多分、飲む日だと思う。

「比奈ちゃんと言っんなら、飲むかもね」

私達の会話を聞いていただろう奈津さんが、にんまりと口端を上げた。

何か言われるんじゃないかと身構えた時、玄関が空いてこたろーちゃんが入ってきた。

「お邪魔しますー」

間延びしたこたろーちゃんの声に、思わずリビングの入り口に目を向けた。

ドアを開けたこたろーちゃんは、ジーンズにTシャツ姿。

奈津さんと私に注目されているのに気がついて、一瞬目を見開いて足を止める。

「なにー？」

怪訝そうに動き出して、いつもの自分の席に着いた。

奈津さんはそんなこたろーちゃんに、箸を向けていたって普通に問いかけた。

「こた。何飲む？」

珍しくそんなことを聞いてくる奈津さんに首を傾げながら、こたろーちゃんは顔だけカウンターの上面に見える私に向かって右の人差し指を立ててにかつと笑った。

「ビール、一本願いますー」

途端、爆笑が吹き荒れたのは言うまでもない。

「うるさいなあ、もういい加減話し変えようよ」

ビール飲みたいだろうって、なんとなく思っただけなのに！

当たったからって、こんな些細な事でもう数十分、中年夫婦だの凄いい言われよう。

私は余計な事をしたという後悔を全力発動して、ご飯を口に運んでいた。

何よりも……

「やっぱり俺ってば、愛されちゃってるよねー」

このバカこたろーが話をやめないから、全く收拾がつかないのだ。

「愛してるのは、本だけ！ こたろーちゃんて入り込んでいいのは、その知識のみ！」

そう言い返せば、

「知識が欲しけりゃ、俺ごと貰ってー？」

バカが伝染る！

「しっかし、こたも情けないよねえ。もう五年越しの求愛行動なのに全く進展なし！」

「そうねえ。ほら……、比奈って頑固だから」

奈津さんも母親も、面白そうにこたろーちゃんを煽る。

「そういう冗談、私だいつ嫌い！」

青春真っ只中の十八歳乙女で、遊ばないで頂きたい！

最後の餃子を口に放り込むと、私は麦茶を飲み干した。

「冗談じゃないんだけどねー」

「なおい悪いわ！」

カンツと鋭い音をさせてコップをテーブルに戻すと、私は勢いよく席を立った。

「あら、もう食べ終わったの？ 早いわねえ」

のんびりと笑う母親に、チョップしたくなるのは私だけだろうか。

早いんじゃないの、早くしたの！

ぷりぷり怒り狂いながら、食べ終えた食器をシンクに下げる。

「どんだけ怒っててもちゃんと後片付けするあたり、真面目だよなー」

「ホントいい子だわ。こた、早く比奈ちゃんゲットしなさい。母さん命令」

「命令とかいらないし。つか、頑張っただけどなー」

「まあ、そうしたらどっちに住むの？」

のほほんと当事者抜きで話し合いを始める三人の会話に、思わず
「zz再び！ と思ったけど、それは耐えた。」

「ばっかじゃないの！？」

内心叫び倒すと、阿呆すぎる会話を繰り広げる三人を無視して私は部屋へと戻ったのだ。

3 帰宅、そして自宅リビングにて（後書き）

蛇足は夜に……

4 蛇足・帰宅、そして自宅にて・こたろー

「比奈って、どーしてあんなに頑固なのかしらー」

「あの一刀両断オーラ、こっわいわぁ」

本当にそーですね、春香さん&かーさん。

俺もそう思います。

比奈が俺の話をまともに聞かない事は分かっていたけれど、最終下校時刻に鍵を返しに来たのにはある意味殺意を覚えた。

根づめるなっっていったよな？

お前、女だからね？

最終下校時刻って言うのは、うちの学校でいうなれば19時。

十二月の19時。ふざけんな。

まあ、俺的には助かったんだけど。

それはおいておいて。

19時に残っているとしたら、教師か届出をしている部活くらい。

どーして俺がこんなに詳しいかと言えば、五年前にここを卒業したOBだからなんだけどね。

そーいうつてもあつて、臨探の事も早めに知る事が出来たんだけど。担任とは仲良くしておくべきだと、心底思った。

あ、別にコネで入ってないからね。

ちゃんと採用試験受けて、トップだったらいいからね？

だってこれで、念願の「比奈の高校生活」に俺が存在できるんだぜ
！。いえーい♪

あ、ひくな、おいちよつと待て。

だってさー、五歳離れてるとさー。

制服姿は見る事はできても、同じ校舎に存在することはできないじやん。

あ、まー。

俺の高校時代を比奈に見せたいかといわれれば、それはごめんこうむるんだけど。

ちゃんと、担任には口止め済み

ほら、若気の至りって……いうじゃんか。

ま、そんなこんなで19時に鍵を返しに来た比奈を促して、一緒に帰宅したわけですよ。

すんげー、嫌そうな顔をさらす比奈とともにね。

……くすん

んで、うちの母親。

料理が壊滅的でした。

たまにどころの頻度じゃなく、比奈の母親である春香さんにおんぶに抱っこ状態。

まあ、俺的にはありがたいけど。

比奈と一緒に飯が食えて、母親の料理から逃げられるわけで。

今日も比奈んちにご馳走になりにはいけば、キッチンカウンターの向こうに立つ比奈とダイニングテーブルのいつもの席に座る母親と目が合った。

珍しく母親が何を飲むか聞いてきたものだから、比奈が丁度図書準備室に来た時の自分の状況を思い出してビールを頼んだ。

疲れる事があつたんだよ。……何があつたって？ そりゃ、おいおいね。

するとなぜか、春香さんと母親が大爆笑。

比奈にいたってはむすつとした顔のままダイニングに出てくると、手に持っていたビールを俺と母親の前においた。

あれ？

今、冷蔵庫開けてたっけ？

基本、俺は平日に酒を飲まない。

今日みたいに疲れてる時とかは、別だけど。

その疑問は、母親が明かしてくれた。

俺がビールを飲む事を予測して、既に用意していてくれたらしい。

愛！

比奈の愛！

なのに、なんでお前はそんなに不機嫌かね。

食事が始まった後も、不機嫌な比奈は相変わらずで。

さっさと食べ終わると、二階の自分の部屋へと上がっていつてしまった。

それを見送って、三人で溜息をつく。

そして冒頭に戻るわけですよ。

「やっぱり比奈ちゃん、こたのこと嫌いなのかしらねえ」

「うわ、かーさんてば。不吉な事言わないでくれよ」

箸でつまんだ餃子を口に放り込みながら眉根を寄せると、階段の方を見ていた母親が俺の顔を見て溜息をついた。

「外見は良く生んでやったのに、中身がこれじゃね……」

おいなんだ、その失礼な言葉は！

「あんまり構いすぎるのも、比奈の性格的に引いちゃうのかしら」
じゃあ、構うなよ！ 構ってるのは、おたくら二人だ！

「でも五年も言われてれば、情も湧くと思っただけだ。あてがはずれたわー」

「小太郎くん、比奈溺愛しすぎて、ちょっとうざいから……」

……溺愛すぎて、ウザイ……

ピキリ、と身体が固まった。

溺愛しすぎてウザイ……、しかも比奈の母親である春香さんに言われるとか、どーなの俺。

「……かーさんたちは、俺とは反対だと？」

恐る恐る聞いてみれば、にこりとわらう春香さん。

「私は小太郎くん、好きよー？ ウザイだけで」

「こたに比奈ちゃんはもつたないけど、うちの娘にしたいから妥協」

……俺の存在価値って！！（涙

5 自室にて

部屋に戻った私は、机の上に出しておいた課題をちらりと見てすぐに目を逸らした。

眼鏡を片手で外して机に放り投げると、そのままベッドに倒れこむ。ばふつといい音をさせた後、ほこりが舞うのが見えたのはこの際忘れよう。

仰向けに身体を反転させて両手を天井に向けて伸ばすと、力を抜いて瞼を手の甲で覆った。

真っ暗になる視界に、伊藤先生……佳苗曰く、ちーちゃんの鋭い視線が思い浮かんだ。

鍵当番を押し付けて帰りやがった佳苗に文句をぶつぶつ言いながら、諦めて戸締りを終えた後。

図書室の横にある準備室のドアを、ノックした。

一拍置いた後、こたろーちゃんの声がして。

その”間”に嫌な感じを抱きつつ、失礼しますと声を掛けてドアを開けた。

「あら、委員長？」

いかにも驚いた、みたいな態度で小首を傾げる伊藤先生。

うん、疑問に思うところはきつとそこじゃない。

あなたの、立ち位置だから！ 残念っ（何気に懐かしい）

向かいになっているはずの席。

なぜかこたろーちゃんの真横に立って、机に手を置いた状態でした。

まあ、高校生身長でも手を机に置けばちよつと上体を屈めるよね？
伊藤先生は、百六十センチくらいあつたはず。

んで、こたろーちゃんは椅子に座ってまして。

顔がね、胸元に来てるんですよ。

こたろーちゃんがまっすぐ見れば、ぽよんなものが目の前に。

まあ、ドアを開ける前は知らないけど、こたろーちゃんは仰け反る
ように自分の机から少し離れている。

その目が安堵の色を浮かべているのが見えて、溜息をつきたくなつ
た。

だつてさ。

こたろーちゃんが安堵するって事は、伊藤先生にとっては邪魔だつ
たってことでしょ？

あー、唯でさえ地味でダサイとか言われてんのに。

意識してこたろーちゃんに目を向けないようにして、伊藤先生に鍵
を差し出した。

「本を読んだら、いつの間にかこんな時間になってまして。今日
の当番が気を遣ってくれたようで、鍵を置いていつてくれたんです」
あんたのせいだよ、伊藤先生。

婚活は他所でやってくれ。

脳内副音声は、絶対聞かせられん。

ニコニコ笑いながらそう言えば、伊藤先生は私に向かって手を伸ば
した。

「三嶋さん。委員長なのに、皆に迷惑掛けちゃダメよ？」

かけてるのは、あんただからーっ！ 残念！↓by二回目

伊藤先生が鍵を受け取るのを見ながら、脳内のみでの雄叫び！

私はすみませんと謝罪を口にして、くるりと背を向けた。

これ以上、無理。

これ以上、ダメ。
我慢できないわー。

とりあえず、自分の役目は終わったのでよしとしよう！
もう帰る！

「ああ、三嶋さん。ちょっと待ってくれる？」
ぎく

こたろーちゃんの声に、マジで体がびくついた。
何を言うつもり？

あんた、何を言うつもり？！

戦々恐々とした内心の怯えを確実に察知しているだろうこたろーちゃん
は、机の横に掛けていた鞆と椅子の背に掛けていた上着を手
取ると、伊藤先生を避けるように大回りをして私の前に立った。

「丁度職員室に用事があるから、途中まで一緒に行こう。もう、校
舎内も暗いしね」

と、これはもう満面の笑みで言いやがりまして。

「あ、え、い、う、え……」

「どんな発声練習」

驚きと突き刺さるような伊藤先生の視線の恐ろしさに呻いた私に、
くすりと笑いながらもその目が笑ってねえっ！

見捨てるんじゃないーオーラ、出まくり！

こたろーちゃんは私の横から手を伸ばすと、半分しか開けていなか
った準備室のドアを全開にした。

そして私の肩を軽く押して、廊下へと促す。

「梶原先生、鞆まで持っていかなくてもよろしいんじゃない
？」

思いつきり置いてけぼり状態の伊藤先生が、寂しそうな声音でこた
ろーちゃんを引き止める。

顔を準備室の中に向ければ、鋭い視線を向けてくる伊藤先生の姿。

……恐怖！

思わず固まった私の視界に、その視線を遮るようにでかい背中が現れた。

「私、臨時教師なのでもう帰らなければなりませんよ。残業は許可されてないんです」

顔だけ後ろに向けたこたろーちゃんは、いたって柔らかく伊藤先生にそう告げると、彼女から見えないように私の腕を掴んで廊下へと押し出した。

「そうですか」

落胆したような声がしたけれど、私から準備室内はもう見えなくて

「お先に失礼します」

こたろーちゃんの挨拶とともにドアが閉められて、伊藤先生の声は聞こえなくなった。

ベッドに仰向けに寝転んだまま放課後の状況を思い返して、どっと疲れが全身を襲った。

明日は、自分の鍵当番。

こたろーちゃんがいてくれればいいけど、伊藤先生だけだったら厳しいなあ。

伊藤先生にとって、ガリ勉タイプの私は好きになれないらしくて、当たりが厳しいのだ。

もともとそうなのに、先生と言う態度で接している時もこたろーちゃんは何かと私のそばに寄って来る。

それは私が図書委員長だからっていう理由が、大きいんだけど。
面倒だなあ、と溜息をついた時。

「比奈、ちょっといいか？」

ノックとともに、こたろーちゃんの声が聞こえてきた。

6 蛇足・自室にて・こたろー

夕飯を食い終えた俺は、まだ少し残るビールを煽りながら、ぼーっと放課後の事を思い返していた。

「梶原先生、これ、分かります？」

比奈との逢瀬を邪魔された俺は、その張本人である伊藤先生に迫られていた。

……なぜに、コノヒト。

相手が比奈だったら、喜びに踊り狂うのに。

まあ、いいや。

伊藤先生は向かいのデスクを使用しているわけで、そこから手を伸ばして俺の机の上に書類を一枚置いて指で指し示す。

それは貸出禁止エリアの説明書で。

分類ごとになってはいるんだけど、そここの場所を移動させる指示が来ていた。

内訳だけだから、場所はそのままだけど。

場所変わったら、比奈、怒り狂うんだろうなって思いつつ顔を上げたら。

おー

思わず、拍手をしたくなった。

ぼよーんとしたものが、目線上にあります！
すっげーな、これ、人に見せて恥ずかしくねーのか？

おかしいな、伊藤先生ってこんなに積極的な人だったっけね？
九月に採用されてから今月で四ヶ月。

最初は普通だったんだけど。

いつの間にか、二人でいればこんな事が多くなってきたわけですよ。
まあ、別に乳見せられて興奮するほど飢えてるつもりないし、むしろそーいった飢餓感は全て比奈に対してしか向いてない。
ただなんてーの。

物珍しいものを見てしまう、あんな感じ。

そーだなー、久しぶりに見たカマキリとか、そんな感じ？

あ、そんなこと言ったら怒られそう。カマキリに。

「梶原先生？」

思わずぼーっと考えてしまつて、掛けられた声に意識が戻つた。

「あ、すみません。えーと……」

そう言いながら書類に目を落とせば、こつこつと足音がしてそれが真横に立つ。

ドアから俺を隠すような、そんな立ち方。

近いんだから、反対側回り込めば良いのに。

そんなことを考えていたら、伊藤先生の手が俺の机に置かれた。

「ふふ、梶原先生でも考え事する時なんてあるんですね？」

伊藤先生はくすりと笑つと、口端を微かに上げて目元を緩める。
少し上体を屈ませるから、再びぼよーんが目線に来てますよ。
俺はそんな事に気がつかない振りをして、顔を上げた。

「一応、人間ですからね。考え事くらいはしますよ、普通に」
ふふ、と笑い返せば、同じ様に笑みを浮かべる伊藤先生。

「何の悩み事ですか？」

「え？」

いきなり踏み込んだ質問をされて、問いかけのような声を上げる。

「相談、のりますよ？」

……比奈の事相談してもいいならな！

という、脳内雄たけびは置いておいて。

面倒くせえな、とりあえず断るよ俺。おーけー？

「あー、申し訳ないんですが……」

そこまで言った時だった。

準備室のドアから、控えめなノックが聞いたのは。

助かったーっ！

今日の鍵当番、ナイスタイミングッ！

断るのは簡単だけど、根にもたれるのは面倒だからね！

「はい、どうぞ」

そついいながら、背を仰け反らせる。

はつきり言ってこの立ち位置、勘ぐられても仕方ない感じだからね。

俺が声を掛けると「失礼します」という、控えめな声。

……ってか、この声……

伊藤先生の横から顔を出してみれば……

「あら、委員長？」

比奈がいたあああッ！

やっべー、マジ危ねーっ！

仰け反っておいて、よかった！

物珍しさから、凝視してなくてよかった！

俺の首繋がった！！

その後、なんとなく俺を引き止める伊藤先生を言いくるめて比奈と帰ってきたわけです。

疲れるだろ？

疲れるとおもわねえ？

こんなん、ビールとか飲まないとやってられねーでしょ。

だってーのにさ。

母親達に遊ばれるとか。

俺、前世で何かしたんですかね。

女弄ぶ的なこととか。

本気で好きな女にだけ！ 振り向かれないとか！ どんな拷問！！

「こたは、押しが強いんだけど肝心なところは弱いんだよね。総合的に、中途半端なヘタレってーの？」

「あら、中途半端なんてそんな。正真正銘、ヘタレって言って上げた方がいいんじゃないかしら」

どっちもどっちだよ！

比奈が二階に上がってから延々と続いている母親と春香さんの俺への批評を聞き流しながら、最後に残ったビールを口の中に流し込んだ。

炭酸の消えかかった苦い液体を胃に送り込んで、よいしょ、と椅子から立ち上がる。

「あら？ 帰るの？ 小太郎くん」

それに気付いた春香さんが、かーさんとの話を止めて顔を向けてきた。

ビールの缶を濯いでそれをゴミ箱に放ると、肩をすくめて溜息をつく。

「流石に今日は比奈、降りてきてくれないでしょーから。帰りますよ」

これ以上、あんたがた二人の話を聞かないようにもね！
少し残念そうな表情なのは、弄れる人間がいなくなるからでしょーが。

そのままダイニングのドアまで足を動かせば、少し真剣な声の春香さんに呼び止められる。

「なんです？」

振り向けば、笑みを消した春香さんがじっと俺を見ていて。

俺の声に、その口を開いた。

「高校卒業が、キーポイントだからね？」

「春香さん……」

「高校卒業、だからね？」

念を押すように言葉を重ねる春香さんに、深く頷く。

「分かってますよ」

今までに、何度も言われた言葉。

”高校卒業”それが、キーポイント

卒業するまで、手を出さなっことなんだろう。

俺を煽っていても、春香さんは比奈の母親。

自分の娘が可愛くて、大切にしたいのは当たり前だから。

「こた、頑張つてー。かーさんのために」

真面目な雰囲気、水を差す自分の母親に苦笑しつつ、廊下に足を踏み出してからもう一度振り返った。

「比奈の部屋、行ってもいいですか？」

やっぱり、ちょっと話したいかも。

今日、まともにしゃべってないし。

春香さんはにつこり笑って、ひらひらと手を振り。

「下に私達がいること、重々肝に銘じて行動しろよ？」

なぜか、ドスを聞かせたかーさんが俺を睨んでいた。

……役割、反対だろう……。

7 寝たふり比奈

ぎくり、と肩が跳ねる。

思わずドアを凝視すれば、再び鳴るノック。

「比奈？ お前、寝てるのかー？」

怪訝そうな声が、それに続いて。

ドアノブが押し下げられるのが、ゆっくりと感じられた。

「……比奈？」

視界は、真っ暗。

つい、目を瞑ってしまった。

「寝てんのー？」

寝てます！

返事できないけど、絶賛睡眠中です！

ポーカーフェイスは大得意。

とにかく今は、寝たふりで切り抜けましょう！

真っ暗な視界に何も見えないけれど、雰囲気で分かるのは。

……こたろーちゃんが、部屋の中に侵入（！）してきやがったああ
っ！

うつわ、目、開けてたら殴りたい！

叫びたい！

蹴り飛ばしたい！

何、寝てたら勝手に入っていていいと思ってるのか、この変態司書め！

脳内で悪口雑言叫び倒していたら、ぎしり、とベッドの端が重みで音を上げた。

そっち側に、身体が少し傾ぐ。

……、何この状況。

雰囲気的に……、あくまで雰囲気に私の横に座ってませんかね！？
しかも、こっち見てるよね！？

やばい、ちよつと緊張してきた。
寝たふりばれたら、ウザそう……。

「……比奈」

思わず、鼓動が跳ねた。

……いや、跳ねたらやばいけど。

こたろーちゃんの、そんな声、初めて聞いた。

なに、この伊藤先生みたいな声。

あつ、甘っ！

「比奈」

再び呼ばれる自分の名前に、ばくばくと鼓動が早まる。

やばい、顔だけは……顔面真っ赤になるのだけはなんとか阻止せねば……！

そつと、私の前髪を指先で梳いていく感触にぴくりと表情筋を動か

してしまった。

こたろーちゃんは一瞬指先を離したけれど、私の様子が変わらない事に安堵したのか、再び指先を髪に通していく。

気持ち、いいかも。

昔、まだ小学生だった頃。

こたろーちゃんもまだ小学生で。

お父さんが単身赴任で奈津さんも働いていたから、よくこたろーちゃんはうちに預けられていた。

私は小学校二年生で。

こたろーちゃんは、六年生。

よく、本を読む人だった。あ、今も変わってないけど。

でも私はまだ駆けずり回って遊びたい年頃で、こたろーちゃんに付きまとってたつけ。

今にして思えば、随分我侘な幼馴染。

けれどこたろーちゃんは諦めていたのかあきれていたのか、私に付き合って遊んでくれた。

そのうち私が疲れて寝てしまうと、よくこうやって髪を手で梳いていてくれたのだ。

安心できて、落ち着けて。

そのまま眠りに落ちてしまう事が、多々あった。

本当に、いい思い出。

今、こたろーちゃんに対して、そんな気持ちは全く無い。

安心なんて、まったく出来ない。

……でも

その指は、変わらず気持ちいい――

7 寝たふり比奈（後書き）

蛇足、明日投稿になるかもです^^；

8 蛇足・寝たふり比奈・こたろー

二階に上がってきた俺は、目当てのドアをノックした。

「比奈、ちよつといいか？」

そう声を掛けても、返事はない。
はて、また無視か？

それが、本に熱中しているのか。

「比奈？ お前、寝てるのかー？」

再び掛けた声にも反応は無く、考えた末（一瞬）ドアをあけてみた。
ゆっくりゆっくり、そろーりそろり。

「……比奈？」

開けたドアの向こうには、ベッドに仰向けに寝転がる比奈の姿。

「寝てんのー？」

声を掛けても、反応はない。
ただ、ちよつと分かるのは。
こいつ、寝た振りしてやがるな？

八畳と大きな目の部屋を持つ比奈は二方面の壁を本棚で埋め尽くし、
腰高窓の下にベッドを置いている。

ドアから覗き込めば背の高い俺にとってベッドに横になる比奈の寝顔を見るくらい、造作の無い事なのだ。

眉間に皺、寄ってますよ。比奈さん。

あなたの嘘をつく時の、癖ですね。

十八年越しの幼馴染を、馬鹿にしちゃいけません。

悉く俺を無視する比奈をからかいたくなって、その部屋に足を踏み入れた。

比奈の部屋に入るのは、久しぶり。

しかも相手がベッドに寝てるとか、ちょっと俺的おいすぎねえ？
っ！か、持つか俺の微小な理性！

ゆっくりと足音を余りさせない様にして、ベッドの脇に立つ。

眉間の皺、増えてますぜー。

あまりに可愛らしい反応に、嗜虐心がつい頭をもたげる。

これは拗ねて口もききたくないとか、そんな感じですかネ。

ああ、なんで一々俺のツボることばっかすんのよ、比奈ちゃんてば。
だから手放せないのー！。

ゆっくりとベッドの端に腰を掛ければ、ぎしりと意味深な音が部屋に響く。

それでも比奈は、懸命に目を瞑ってる。

うん、頑張れ。

その分、俺は楽しい。

きつと寝た振りしながら変態司書ーとか変態こたろーとか言ってるだろーけど、一向に構わん。

むしろ、OK！ その通り

比奈の眼鏡を外した素顔は、はっきり言ってめちゃ可愛い。

フィルター掛かってるって言われるかもしれないけど、マジで可愛

い。

眼鏡も好きだけど、素顔の方が好き。

でも、学校ではそのままでよし！

俺以外に、あえて見せなくていいから！

ああ可愛いなあ、ちくしょー！。

「……比奈」

ちょっと俺的、頑張ってみることにしました。

甘く、囁くように名前を呼ぶ。

普段はこんなスキル、発動しないんだけど。

冗談でかわされている俺としては、そうじゃないってことを知らしめたくて。

「比奈」

ハチミツでも添加されてんじゃないかってほど、甘く囁く。

つてーか、甘い。

比奈は、名前さえも俺に甘さを覚えさせる。

微かに頬が赤いのは、ちゃんと俺の気持ちごと伝わってると思っているんだろうか。

つーか、ただ単に照れてるだけか。

目を細めて比奈の寝（って本人は主張している）顔を見つめながら、ゆっくりと指を伸ばして額に掛かる前髪を梳いた。

さらにと指先から伝わる感触に、感情を突き抜ける強烈な焦燥感。

何で伝わんねーのかな、何で比奈は俺を避けるんだろう。
小さい頃は、”こたろーちゃん、大好きー” って言って、俺の後を
ずつついて回ってたのに。

それこそ本好きになったのは、同じく本好きな俺の影響かと思った
のに。

ただ単に好きなだけで、俺の影響なんて数ミリもないってこと、本
人に断言されたしな。

現に、中世文学が好きな俺に対して、古典文学が好きな比奈。
好きなものは一緒でも、興味の範囲が違うらしい。

なんだよなー、大人の階段上ってる最中に俺は振るい落とされたっ
てこと？

そんな階段、比奈に必要なねえ。むしろ、俺が壊す。

無言のまま髪を梳く。

途中比奈の頬がぴくりと動いて少し驚いたけれど、目を開けないか
らそのまま指先で彼女の髪を遊ぶ。
次、いつ触れられるかわからねーし。

しばらく梳いていたら、こてりと比奈の顔が横を向いた。

「ん？」

微かに、寝息が聞こえる。

手を戻して顔を覗き込めば、寝入っている比奈の姿。
その眉間に、皺はない。

「寝やがった」

マジか。

この状況で。

っても、最近怒鳴られてばっかだからな。

昔みたいに安心を与えられたらいいとは思っけど、それだけじゃ比奈を自分のものにできない。

男として、意識してもらわねーと。

指先を伸ばして、比奈の唇を親指でなぞる。

ふにふにと柔らかい感触に少しもつたいたい気がしたけれど、息を吐き出してベッドから立ち上がった。

足元にたたまれていたタオルケットを広げて、比奈に掛ける。

そのまま電気を消して、ドアを閉めた。

階下からは、母親二人の楽しそうな会話が聞えてきて。

閉めたドアをに、ゆっくりと掌を置く。

比奈、猶予は高校卒業するまでだからな。

卒業したら、覚悟しておけ？

8 蛇足・寝たふり比奈・こたろー（後書き）

1～7に（改）がついていますが、変更点は話数表示を加えただけです。

本文は変更していませんので、よろしくお願いします。

9 カウンターと後輩

目が覚めたら、朝でした。
つて、私！ 駄目じゃんっ！

「頭痛い……」

がんと痛みを訴える頭を片手で押さえながら、私は憩いの図書室のドアを開けた。

今日は当番だから、いつもの安息の地に赴くことはできない。けれどカウンターにいても本は読めるから、まあいいとする。

「お疲れ様です、委員長」

カウンターに歩み寄れば、可愛い男の子。

顔の作りがじゃなくて、もうなんていうか仕草が！

しっぽふってご飯待ってる小型犬って感じで。

お手！！↑……は、違つか！

「お疲れ様、松井くん」

なんとか口端を上げて笑みを作ると、彼の後ろを回って空いていた席に腰掛けた。

松井くんは、一年生の男の子。

特に何の理由もなく委員会を選ぶ人が多い中で、彼は本好きが高じて図書委員になったある意味同士！

友人知人には、読書をおっさん趣味と一刀両断されているもので。なにやら、嬉しい。

彼と一緒にカウンター当番は、本当に楽。

気を使って何か話さなければならぬわけじゃないし、お互い本を

読んで時間を過ごすだけ。

最高です！ 素敵です！

お手！ ↑どうしてもやりたい（笑

さて、今日は久しぶりに源氏物語持ってきたんだよね。
たまに読破したくなる。

自宅から持ってきた源氏物語を開くと、いつもなら幸せな細かい文字の羅列にずきりと頭が痛んでこめかみを指先で押した。

昨日寝たふりして切り抜けようとしたら、すっかり眠りに入っちゃったんだよね。

久しぶりに髪を梳かれたその感覚が、とても気持ちよくて。
目、覚めたら昨日のまんまの体勢でワタクシ流石に焦りましたよ。
思わず着衣の乱れを確認した私、間違っていないと思う。

ぐりぐりとこめかみを押していたら、心配そうな松井くんの声に顔を上げた。

「頭、痛いんですか？」

読んでいたのだろう本を机に伏せて身体ごと私の方に向けている彼は、とても心配そうな顔。

思わず、胸にキュンとくる。

かーわーいーいー

決して現実には口にしない言葉を脳内雄叫び発動して、内心悶える。
何、この如何にも心配です、どうしたんですかご主人様！ 的な雰囲気！ ！ 的な態度！

——比奈の読書の範囲は、ラノベから乙女小説からはては古典文学・俳諧等々雑食多岐に渡る。

故に、萌えにものつていけるのだ！——↑書き手の雄叫び

けれど……と、私は内心自嘲する。

心配してもらうような理由で頭痛がするわけじゃないのが、何やら申し訳ない。

私はこめかみに当てていた指を外すと、極力笑みに見えるように口端を上げた。

「大丈夫よ、少し寝不足なだけだから」

嘘だけど！

まだこっちの方がいい！

寝すぎて頭痛いより、寝不足の方がなんとなく図書委員長的には正解のはず！

よく分からない事を納得しながら松井くんを見ると、がたりと椅子から立ち上がった。

「寝不足は辛いですよ！ 僕がカウンターにいますから、いつもの場所で寝てきてください！」

おっと、声が大きいよ松井くん！

いやまあ、確かにいつもの場所なら寝ててもばれないけど……。

脳裏に浮かぶのは、昨日の伊藤先生の言葉。

”委員長なのに、皆に迷惑掛けちゃダメよ？”

どくり、と不快な鼓動が身体を震わせる。

嫌味のような、けれど正論であるその言葉に反論する余地はなかった。

確かに伊藤先生の態度が最近顕著すぎて生徒達が引いているのは確かだけれど、私がああ時間まで読書にふけていなければ避けられた事態だった。

少なくとも図書室を閉めるべきその時間に、私の読書の邪魔をしないでくれたのは下心もあるだろうけれど佳苗の優しさもほんの少し入っているはず。

自分のダメさ加減に落ち込みながらも、松井くん気付かれないように両手を振って彼の言葉に遠慮を示した。

「大丈夫よ、松井くん。心配してくれてありがとうね」

そう言っこの話はおしまいとばかりに、視線を手元に落とそうとした時だった。

「委員長、体調悪いの？」

声を掛けられて、顔を上げる。

カウンターの前には伊藤先生と、その彼女に腕を掴まれているたろーちゃんの姿があった。

10 蛇足・カウンターと後輩・こたろー

春香さんの話だと、比奈はあのまま朝まで目が覚めなかったようだ。寝る子は育つ（笑）

翌朝出勤のために玄関から外に出ると、丁度回覧板を手に歩いてきた春香さんとかちあった。

「春香さん、おはようございますー」

「あら、おはよう。小太郎くん」

声を掛ければ、ほんわりとした笑みが帰ってくる。

春香さんの手から回覧板を受け取ってそれを玄関の中に放り込むと、まだそこにいた彼女と目があつた。

「春香さん、どうかしたのー？」

帰る気配の無い春香さんに首を傾げて問いかければ、春香さんは小さく頭を振ってにこりと笑った。

「比奈、あの後ずっと寝てたのよ。起きたら朝で、本人びっくりしてたわ」

「うーわー。そりゃ、俺もびっくりですねー」

あのままって、十時間近く寝てたって事？

「でもまあ、寝すぎて頭痛そうですけど」

苦笑気味に続ければ、本当にね、と溜息をつかれる。

そして何やら意味深な視線を俺に向けて、春香さんは家へと戻っていった。

……あれ？　なんか、誤解されてる？

ふと思ったけれど、内心、すぐに否定した。

ないない。俺のへたれさだけであんだけ盛り上がるんだからなー。

そう思いなおして、俺は比奈の待つ（別に本人は待っていない）学校へと出勤したのだ。

「さてと」

ぼつりと、呟く。

俺が今いるのは、比奈の大好き憩いの場所近くの貸し出し禁止本コーナー。

うちの学校は一応、名の知れた進学校。

普通科と情報処理科の二つで構成されていた。It's 過去形。

俺がいた頃は、だ。

今年、比奈が三年に上がった際に、新たな科が新設されたのだ。

文系進学科と理系進学科。

その道の有名大学を目標とした生徒を育成するのが目的で、それに伴って校内で変更される部分が多々出来た。

俺が司書教諭として、臨時に雇われたのもその一つ。

今までそれなりの蔵書のみを扱っていたけれど、専門的なものを増やす事が生徒や教師から求められたのだ。

司書にも色々仕事があるけれど、今回の俺の仕事は教師と話し合っ
て購入する蔵書を決め、そして整理し目録として概要をデータ化する
のが大きな点。

理系と文系、各々の教師から今日の午後が上がってきた購入希望の
目録を手に、それまでスペースのあまりなかった貸し出し禁止本エ
リアの配置をどう変えるか思案していた。

いるんだよ。たまに、貸し出し禁止だって言うのに鞆に入れて持つ

て帰る奴。

あと、最悪なのが必要な部分を切り取る奴とかね。

図書館と違って学校の図書室だから、セキュリティ用の管理タグとかつけないしな。

必然的に、このエリアを閉鎖して申請入場制にするか、カウンターから見やすい位置に場所自体を変えてしまうか。

本来なら全書にそういうことをしたいけれど、学校図書室という人員とスペースの問題上、出来る範囲は決まってしまう。

ならば希少本や高価格の本の多い貸し出し禁止本が、優先となるのは仕方ない。

ふむ、と顎に指先で触れて考えていた俺は、そういえば今日のカウンター業務が比奈の担当だった事に気がついた。

この学校の誰よりもこの場所を知っているだろう比奈なら、多分ここを使う大体の人数も人気のある蔵書も把握しているだろう。

比奈が大好き憩いの場所はこの奥だけれど、そこからこの場所はよく見えるのだから。

伊達に、あの場所にずっと陣取っているわけじゃないだろう……と思う。

……いや、集中しすぎててみてない可能性も……？

そう考えた俺は、迷うことなくその足をカウンターへと向けた。

生徒な比奈に、話しかけるチャンス！

情報は得られないかもしれないけど、少ないチャンスも見逃さないぜ！

普段だって話しかけたいのに、思いつきり比奈が拒否するんだよね。顔で。

くんじゃねえ、よるんじゃねえ、話すんじゃねえ。

そう聞えてくるのに話しかけに行く俺って、M？

ま、比奈相手ならSでもMでもいいけどね。
つか、どっちも希望？

苛めたいしー、冷たくされても結構平気。

比奈の本音は、分かってるつもりだもんね。
本気の拒絶なら、あいつは口も聞かない。

アホな思考を廻らせながらカウンターの見える場所までやってきて、
足を止めた。

そこには、こめかみを指で押す比奈の姿。

寝不足で、と隣に座る一年坊主に話しかけているのが聞える。

……寝不足じゃなくて、寝すぎだろ。

つい笑いそうになった俺は、子犬よろしく比奈を心配そうに見つめる一年坊主に目が止まった。

……お前、よもやまさか……

比奈を見る目は、純粹に心配しているように見えている、が、いや
しかし！……

なんか、イラッとする目してやがんオイ。

しかも比奈の目が”いやーんっ、かーわーいーいー”とか言ってる
うでむかつく。

何、年下の魅力にやられてやがる。

お前な、可愛くても年下でも男は男！

その顔の下で、何考えてんのかわかんねーんだからな！

俺みたいに！

↑比奈にはバレバレ！！

↑書き手雄叫び！！

俺は一瞬にして冷静な思考を、貼り付ける。

カウンターに近寄りながら、にやりと口端を上げた。

年下の魅力よりも、大人の魅力だろう。

若干狩猟者にでもなった気分でカウンターに向かうと、小さな悲鳴とともに後ろからするりと腕を掴まれて前に引つ張られた。

驚いて目を向ければ、腕を掴む乳……じゃなかった伊藤先生の姿。うるん、という上目遣いに思わず呆氣にとられる。

「ごめんなさい、躓いちゃって……!」

「……イエ」

ぐあああつ! こっちの大人の魅力きやがったあああつ!!

10 蛇足・カウンターと後輩・こたろー（後書き）

今日、新しいPCが届く予定でして、設定等に勤しむ予定です。

一応明日更新は出来ると思うのですが、日中掛かり切りに出来ない
ので、

間に合わなかったらすみません。

月曜日は必ず更新します。

篠宮

11 幼馴染と後輩と先生と

「で、どういった本ですか？」

隣に立つこたろーちゃんを見上げれば、優しい視線とかち合う。それは親しみを込めつつも他人を感じるもので、思わず渡された用紙をひったくるようにその手から受け取った。

「三嶋さん？」

先生モードのこたろーちゃんの声は、心臓に悪い。知らない人みたいで、なんだか嫌。けれどもつと嫌なのは。

「委員長、わかる？ 大丈夫？」

親切な振りして心配しつつ、私達の事監視している伊藤先生！ あなたですからーっ！！ 残念っ↑何気に好き

先ほどカウンターの前で腕を組むように立つ二人を思わず呆気にとられて見ていた私は、おずおずともいうように掛けられた声に意識を戻した。

「梶原先生、伊藤先生。何か御用でしょうか」

それは少し怯えたような、松井くんの問いかけ。意識せず松井くんを見遣れば、問い掛けたもののその表情はびくびくしていて。

まるで、尻尾を足の間にしまった小型犬！！ 決して大型でも中型でもない！ チワワ！

萌えるーっ！ かわいい！！ もう、一つとして不可な場所無し

！！！！

なんて萌えに悶えていた私は、何やら不機嫌そうな視線に目を向けた。

……こたろーちゃん、松井くん睨んでどーしたのさ……

不機嫌な視線の元は、こたろーちゃんだった。

松井くんを表面上にこやかに見ているけれど、目が全く笑ってない。可愛い可愛い松井くんは意味は分からずとも本能的に恐れを感じるようで、ちらちらと視線を彷徨わせながらこたろーちゃんを伺っているようだった。

あー、なんでこたろーちゃんは、可愛いわんこを苛めるかな。

あえて言うなら私も物凄く失礼な思考をしているんだけど、それは棚に上げる！ めっちゃ高いとこにネ！

小さく聞えないように息を吐き出すと、伊藤先生とこたろーちゃんに目を向けた。

「あの、何か御用でしょうか」

冷静な私の声に、こたろーちゃんが顔を向けてきた。

あれ？ 私に対しても、何か怒っていらっしやる？

少しだけ和らいだ気がするけど、不穏な空気は全くなっていない。

首を傾げると、もう一人事情を知っていそうな伊藤先生に目を向けた。

「あの、何か……」

「私は特に用はないわ」

左様ですか。

んじゃ、カウンター前に来るなよ。

イラッときたけれど顔には出さず、松井くんを目配せする。
用がないなら、座っていいよね。

大体、ここで皆が立っていたら借りに来る人に、邪魔だし。

軽く会釈して座ろうとした私に、やっとこたろーちゃんが声を掛け
てきた。

「三嶋さんに用があるんだけど。松井くん、彼女借りていっても
いいかな？ カウンター、頼める？」

「は？」

「はいっ！」

怪訝そうに聞き返した私と、座ろうとしていた体を再びピンツと伸
ばして返事をする松井くん。

こたろーちゃんは穏やかな笑みを浮かべて、私を見ている。

「私、ですか？」

なんの用だよ、学校でー。

思わず胡乱気な視線を向ければ、口端を上げたまま手に持っていた
紙を軽く顔の前で振った。

「貸し出し禁止本エリアについて、聞きたい事があるんだ。読書の
邪魔をしてしまって、申し訳ないんだけど」

本当に、申し訳ないと思ってるっしやいますか。

「あら、それなら私がお手伝いしますよ。委員長は、読書大好きで
可哀想ですし」

伊藤先生、本当にそう思ってるっしやいますか？

顔、笑ってますけど。

まあ、でもこれで私がこたろーちゃんと一緒に行くことはなくなっ
たと。

本読もうっ

そう結論付けて、椅子に座ろうとした時だった。

「伊藤先生。お気持ちは嬉しいんですが、私は三嶋さんの意見を聞きたいんですよ」

「は？」

「なんで!？」

おもいつきりこたろーちゃんを見た私は、イラついた視線とかち合つて座ろうとしていた体を再び戻す。

まあ、こたろーちゃんだけど一応先生だし。ここであまり反抗しても、仕方がない。

つーか、怖いよ! 顔! 主に目!!

「分かりました」

そう伝えれば、満足そうに頷くこたろーちゃん。

この方は優しそうに見せかけて、自己中&思い込みの激しい御仁であつた。

怒らせると、面倒くさい。ひっじょーに、面倒くさい。

松井くんをお願いねという意味で軽く手を上げれば、彼はしっかりと頷いてくれました。

……お留守番わんこ!!

チワワじゃないなら、豆柴でもOK!!

くうつ、と拳を握り締めつつこたろーちゃんの前に立つ。

「三嶋さん、ごめんね?」

思つてないだろー。

「イイエ」

これも、図書委員長のお仕事ですから。

そう言外に含めれば、少しだけ苦笑するこたろーちゃん。

こんなアイコンタクトとかとってると、伊藤先生に文句言われ……目線をそのまま下ろせば、がつつりこつちを見つめる伊藤先生がお

りました。

こわっ

思わず目を見張った私に気がついたのか、こたろーちゃんが顔を動かさず視線のみで伊藤先生を見た。

「……」

ナイスどん引き。

こたろーちゃんは伊藤先生に掴まれている腕を少し揺らして、申し訳なさそうに首を傾げる。

「そろそろ、離して頂いても？」

「あ、すみません」

恥ずかしそうに頬を赤らめて腕を離れたけど、あなた一瞬目を細めましたよね？

エア舌打ちが見えたような気がしますよっ！

こたろーちゃんは掴まれた部分を軽く払うと、斜めに体を引いた。

「向こうで」

「……ハイ」

なんか、罪人にでもなった気分だ。

歩き出せば、なぜか伊藤先生もついてきて。

不思議そうなこたろーちゃんに、満面の笑みを彼女は向けた。

「私も司書ですから。変更箇所についてのお話し合いなら、把握させて頂きたいですわ」

にっこり。

こたろーちゃんは「ええ、分かりました」と頷いたけれど、今見えないところで舌打ちしたよね？

しかも、エアじゃなくてリアルで！

ほら、伊藤先生が不機嫌そうに私を見てるじゃないか！！
やめてよー、八つ当たりは私に来るんだからああ。

そして、このページの冒頭に戻るわけです。

こたろーちゃんは、穏やかで親切で優しいけれど。

自己中で思い込みが激しくて、何よりも今は建前のオブラートに綺麗に包んでいるけれど好き嫌いのハッキリしている御仁でありましたよ……

11 幼馴染と後輩と先生と（後書き）

やっぱPC四苦八苦中です^^;
遅くなりました、すみません。

12 蛇足・幼馴染と後輩と先生と・こたろー

渋る比奈をやつと連れ出せたと思ったら、邪魔な奴までついてきやがった。

「つかさー、本性出しているならマジ泣かせてもいい？」

どっちかってーたら、穏やかとか間のびしてるとか言われる俺だけとき。

比奈との逢瀬を邪魔するなら、マジキレるよ？

先生と生徒とかめちゃ萌えるシチュエーションなのに、そんな甘さを一欠けらどころか砂粒に匹敵するくらいしか感じさせてくれない比奈との数少ない逢瀬だっつーのに。

しかもただ単に逢瀬だけを邪魔されるなら仕方ないけど、仕事上の意見を聞きたくて連れてきたのにそれ邪魔するとか、効率悪い。

諦めたように俺からリストを受け取った比奈はざつと目を通すと、貸し出し禁止本エリア傍に貼ってある分類表を見つめた。

分類ごとの増減を大体把握して、このスペースをどう増やすか。

もしくはエリアごと、違う場所に移動させてしまつか。

生徒である比奈の意見を鵜呑みにはしないけれど、意見として聞くには彼女はうってつけだ。

図書委員長であり、読書好き。

理系に関しては難しいかもしれないけれど、文系に関しては彼女の意見は重要だと思う。

確かに比奈と図書室で一緒に過ごしたいという邪な願望もないわけではないが、つか六十%以上はそれで満たされて入るが、ちゃんと司書としての職務の上で彼女を連れてきたのだ。

故に。

邪魔だ、乳！

そんな事を考えつつ、表面上は穏やかに比奈を見つめる。

比奈は少し首を傾げて指先を口に当てると、んー、と喉の奥で声を出した。

猫、だな。ホント。

構いすぎれば逃げるけど、構わないと様子を伺う。

いや、様子伺われたことないけど。

昔はなー、嫌になるほどまとわりついてきたのに、本当最近は逃げるばかりで。

ツンデレのツンのみじゃ、俺が報われない（涙

比奈が考えている最中、もう一枚コピーしておいたリストをポケットから出して見ながら、ふうと溜息をついた。

全部じゃないけれど、貸し出し禁止本はページ数が結構半端無い。

と言う事は、かなり幅を取るよな。

やっぱ、カウンター前に移動して広めに場所をとるしかないような気がする。

しかし、この本の概要のデータ化とか、マジ辛え。

まあ、嫌いな仕事じゃないけど、量を考えると冬休み中もある程度出勤する事考えた方がいいかもなー。

すると比奈がふいっとこちらに視線を向けて、俺を見た。

「こ……梶原先生、ちょっとカウンターに言ってきていいですか？

十分くらいで、戻りますので」

少し動揺したように言い直した比奈は、俺が頷くと同時に少し早足でカウンターへと戻っていった。

あー、集中しすぎて忘れたな。
今の状況。

こたろーちゃんと言いそうになって動揺した比奈、なんて可愛いんだろうー。

ちよつと目元が赤くなっていたのを、本人に言ったら恥ずかしがるんだろうなー。
で、回し蹴りされそう。

そんなことを考えていたら、Yシャツの腕の部分をくいつと引っ張られて顔を向けた。

「……何か」
そこには、まあお分かりのように伊藤先生。
見上げるように、俺を見つめている。

「あの、私では役に立てないのかしら」

またさつきと同じ言葉。
いい加減うんざりだ。

そうは思っても、一応先輩だし、同僚だし。
聞えないように小さく息を吐き出して、目元を和らげる。

「いえ、色々な意見を聞いて大体の骨子が決まったら、ちゃんとご報告いたします。伊藤先生には割り当てられた担当箇所がありますし、ある程度は私と担当教師で整えようと思いますので」

比奈の名前は、一応出さない。
何を考えているのか、比奈を牽制しているようだから。

お前が何したって無駄だよ。
俺の意識は、比奈にしかむいてねえ。

伊藤先生は少し悲しそうに目を伏せて、でも……と呟いた。

「生徒に聞くのでしたら、私の方が説明できると思うんですけど」
……しつこい。

困ったように演じつつ、左手で首元を押さえる。

「あー、彼女がよくあの奥で読書をしているのを知っているので、図書委員長として生徒としての意見を聞きたいだけです。鵜呑みにする訳ではないですし、参考程度に聞きたいだけですから」
比奈が嫌がるから、仕方なく図書委員長と生徒という言葉を強調する。

そしてやんわりと伊藤先生から腕を取り戻すと、一・二歩横にずれた。

そのままカウンターへと、顔を向ける。

「でも……、生徒の意見を聞いても……」

少し馬鹿にしたようなその声音に、流石の俺もイラッときてつい口を開いた時だった。

「お待たせしました」

比奈の落ち着いた声に、口を閉じる。

嫌悪感に昂ぶりつつあった感情が、一瞬にして穏やかに収む。

穏やか、間延びしているといわれる俺だけど、比奈の事を持ち出されるとどうしても沸点が低くなってしまう。

大人だというのに、駄目だな。

比奈はこっちの微妙な雰囲気も気にせずに、早足でそば来ると机に持ってきた数枚の紙を置いた。

「これ、貸出の実績情報なんですけど」

そういつて俺に示したのは、ここ二・三年の図書室の貸出実績だった。

どのような分類が、どの学年に、どのくらい借りられているか。

それを文系と理系に、大まかに分けた資料。

それを踏まえた上で、必要と思える本の要望書。

「どうしたの？ この資料」

意見を聞こうとは思ってたけれど、こんな資料が出てくるとは思わなかった。

比奈は少しバツの悪そうな表情を浮かべて、ちらりと伊藤先生を見遣る。

俺は少し体をずらして比奈から伊藤先生を見えなくすると、答えを促した。

「貸出実績は……、普通にデータがあるのでそれを加工して学年別・科別の資料として纏めておいたんです。あとはたまにもらう要望とか、一年生に話を聞いて纏めたあったらいいなっていう本の傾向とかを……その……」

声が尻つぼみになっていくのは、确实伊藤先生に何かを言われると思ってる事だろう。

けれど俺は、反対に彼女に今の話を聞かせたくて仕方なかった。

ここまでとは思わなかったけれど、确实あなたより役に立ってくれ

ますよ？
俺の比奈は。

13 それは、失敗

私は夕食の後、自室に籠ってパソコンをいじっていた。
小気味よい音が、部屋に響く。

読書も好きだけど、細かい仕事をするのも好き。
故に、資料を作るのも好き。

だけど。

「……よもや、こんなことになるうとは」
ため息交じりに、エンターキーを力任せに叩いた。

放課後、こたろーちゃんに聞かれた「貸し出し禁止本エリア」に関する相談ごと。

そのリストを見た時に脳裏にひらめいたのが、一学期に委員会で議題となった意見だった。

今年から進学科コースが新設されたうちの学校は、改善・変更をしていく箇所が増えた。

その一つが、図書室の蔵書。

今回こたろーちゃんが臨時採用されたのも、そこら辺の事情だと本人から聞いている。

しかし、委員会ではこたろーちゃんが来る前から、蔵書が少ないんじゃないかという意見が出ていた。

その中で調べたのが、放課後にこたろーちゃんに見せた資料達。

まあ、参考にはなるかなと思って伊藤先生には確か提出したと思うんだけど、あの時それを口にしちゃいけない雰囲気なのはさすがの私にも分かります！

たぶん学校の方で計画が持ち上がって、伊藤先生はそっちの方を重視したんだと思うんだけど。

いや、普通そうなるし。別にそれに関して、文句も何もないけど。

こたろーちゃんは、教師と話し合って大体決めた購入予定のリストと渡した資料を見比べて、私の話をちゃんと聞いてくれた。

途中、伊藤先生が眉間にしわを寄せながら退場したのがすごく気になるけれど、やっぱり、その、嬉しいのだ。

自分の話を聞いてくれるということが。

変態で軽くておバカなこたろーちゃんだけど、年下とか生徒とかそういうフィルターで対応しないからそういうところは好き。それ故、頼まれた資料を文句も言わずに纏めているわけです。

図書委員長の鏡だね、私。

一通り目途がついて、印刷終えてざっと目を通すと、机の上に置いてパソコンの電源を切った。

時計を見れば、既に深夜。

電気を消して、羽織っていたカーディガンを脱ぐ。

ちよっと根詰めすぎちゃったなあと体を伸ばしながら、ベッドに転がった。

眼鏡が顔に食い込んで、地味に痛い。

眠気覚ましも兼ねて小さく開けてある窓から入り込む、冷たい空気。そろそろ閉めないと、風邪ひいちゃうよね。

「明日、伊藤先生、普通だったらいいんだけどな」

そう呟きながら窓を閉めようと手を伸ばしたら、

「大丈夫だろ」

……！

独り言に返事があつて、驚いて窓を開ける。
少しくぐもった様な声だけど、それは紛れもなく……

「こたろーちゃん……」

ベッドの真横にある窓を開ければ、向かいのベランダで煙草を吸う
こたろーちゃんと目があつた。

気怠そうにベランダの柵に持たれながら、携帯灰皿手に煙草を銜
えている。

こたろーちゃんちは、室内禁煙。

だから吸う時はベランダに出てくる。

そのベランダというのが、私の部屋の横で。

実は、手を伸ばせばぎりぎり私でも届いちゃうくらいの距離しかない。

でも。だけど。

「こんな時間に煙草吸うとか、こたろーちゃん明日仕事する気ある
？」

薄暗い部屋の中、机の上にある時計は夜中の一時過ぎを指していて。
いつもこんなに遅くまで起きてるのかなと思いつつ、少し咎めるよ
うな口調でこたろーちゃんを見る。

すると銜えていた煙草を携帯灰皿に押し入れて、それを羽織ってい
たシャツのポケットに突っ込んだ。

「それは俺のセリフ。集中しすぎ。もしかして、今日頼んだやつや
つてたんだろ」

いつもより真剣みのある言葉で言い当てられて、思わず口を噤む。でもすぐに、頭を振った。

「違うよ。なんでこたろーちゃんの為に、私がそんな事しなきゃいけないわけ？」

ふんっ、と鼻で笑って窓を閉め……

「えっ?!」

「ちよっと、どけ」

…… ようとした手の上から掴まれて、反対に大きく開けた。

そのまま、ベランダ越しに反動をつけて私のベッドの上に降り立つ。一気に冷たい風が部屋に入ってきて、ぶるりと震えた。

いや、きつとそれ以外の理由でも。

裸足の足が、ベッドに座る私を跨いで床に降り立つ。

何も言えず、呆けたようにこたろーちゃんの動きを目だけで追った。あまり足音がしないのは、なんでだろうとか。

確かに跨げる距離だけど、危なくないのかとか。そんなことを考えていたら、反応が遅れた。

こたろーちゃんの手には、数枚の紙。

それは――

「あっ!」

慌てて取り返そうと、ベッドから降りて手を伸ばす。

それは。

「嘔吐き」

ぼそりと呟くこたろーちゃんの声が、低い。

「返して……っ」

机の上に置いておいた、さっきまで作っていた資料だった。

14 蛇足・それは、失敗・こたろー

「っはぁ、肩凝った」

両腕を伸ばせば、バキバキと至る所から音妙な音が鳴る。

見ていたパソコン画面から視線を外し、机の上に置いてあった携帯を手に取った。

「ちよつと、やりすぎたか」

翌日が出勤だと思つと、流石に寝ないといけない時間だ。

「あ」

そんなことを考えていたはずなのに、なぜか手には煙草の箱。

まあ、一服してから寝るか。

飯食った後とか、仕事した後はどうしても吸いたくなる。

けれど、うちは俺しか吸わないから室内禁煙令が敷かれていて、吸うならば、ベランダに出るしかない。

寒そうだな。

ふと、自分の格好を見る。

長袖のTシャツに、スウェット。

窓に指先で触れて寒さを実感すると、椅子に掛けておいたシャツを羽織ってベランダに出る窓を開けた。

このベランダの横が、実は比奈の部屋で。

俺が反動をつければ、まあ危ないけど部屋に行けるくらいには近い。比奈に、絶対来るなと念を押されてるけどね（涙

でもさー、幼馴染の甘いやりとりとか、欠片でも妄そ……じゃなかった想像しちやだめかね。

ベランダ越しに話すとか、ちよつと幸せなんだけど。

二十三歳、男性教師（臨時）が、考えちゃいけないことってか。

いや、まあね。確かにそうかもだけど。
ほら、臨時だし。

え、ていうか、ホントに駄目？

マジで生徒に手を出すわけじゃあるまいし、そんな位の理性はあるわ
い。

だから待つてんじゃんか。

比奈が、卒業する日をさあ。

だいたいな。

教師にだって、人並みに恋愛感情はあるぞー！！

神様じゃねえ！

聖人君子とか、そんな胡散臭いものに当てはめるな！（あくまで、
個人の考えです）

そりゃ、誰も比奈の部屋に侵入しようとは思ってねーよ？

そこは、幼馴染兼恋人になってからっしょ。

さすがに、俺もそこまで節操なしじゃねー。

そんな事を考えながら、顔をあげたら。

「……オイ」

比奈の部屋に、電気がついてた。

深夜十二時半。

いつもなら、寝ているはずの時間だ。

いや、毎日寝る時間とかしらねーけど。ストーカーじゃねーぞ。

平日、この時間に煙草吸いにベランダ出てきて電気ついてたことっ

て、テストとか受験とか、そういったイベント以外あんまりない。

首を傾げながら煙草に火をつけると、肺一杯に煙を満たす。

あー、幸せ。

どうせ、比奈と結婚しても室内禁煙は変わらないだろうから、禁煙に本気で取り組むかなあ。

俺の頭の中では、大学卒業したら結婚申し込むつもりなんですけど。は？ 早い？

いや、遅いね。

ある意味、高校卒業したら即結婚でもいいんですけどー。

大学に入って、かわいい比奈に虫でも着いたらどーしてくれる。

さすがに、大学まで乗り込んでいけねーし。

俺も来年の就職先、決まってるしな。

どうしても行きたかった場所だから、一年フリーターっていうリスクを取ってでも待ちたかった。

俺、しつこいかな。性格。

こたろーちゃん、うざい！ って、いつも言われてるけど、あれ、比奈に対してだけのつもりだけなんだけど。

日常生活一般、俺、しつこい??

そこまで考えた時、比奈の部屋から機械音が聞こえてきた。

……印刷する、音？ なんだ？

しかもあいつ、窓開けてやがる。

さすがに近いからと言って、窓を閉めてればそこまで音は聞こえない。

それが聞こえてくるってことは、窓を開けているってことで。それってたぶん、部屋を冷やして眠気を覚まそうとしているってこ

とで。

……て、ことは。

理由に思い至って、はぁあと溜息をついた。

なんで比奈は、真面目でいい子なんだろうーな！。

体全体をベランダの柵にもたせ掛けて、煙草を口に銜える。
目端に、煙が立ち上っていくのが映った。

読書なら、眠気なんて覚まさなくても比奈は集中できる。
けれどそうではない、という事は。

放課後の出来事が、脳裏を掠める。

”そこまで資料ができているなら、こういうのも出来るんじゃない？”

そう言って、いつの間にか戻ってきた伊藤先生が提示したのは、自分の担当箇所に関して作っていただらう資料。

それは、確かに比奈が作ったものより、詳しかった。

教師の目線から、だけど。

要するに、嫌味、だ。

私はここまでできるけど、っていう。

よっぽど、俺と比奈のやり取りが気に食わなかったらしい。

風いだ感情に、またスイッチ入れに来やがったなと不機嫌オーラを醸し出したら。

”とても、見やすいですね。どのように作るんですか？”

と、純粹に質問したのよ、俺の比奈は。

なんて可愛いんだろう！

嫌味、流してよ！

伊藤先生も面食らったらしくて、しどろもどろになりつつ口端を妙に引き攣らせた。

”あ、の。えっと、私が作るわ。その資料、貸してもらってもいい？”

要するに、比奈の資料を基に自分が作り変える、そう言いたいらしい。

っていうか、本音駄々漏れ。

だというのに、比奈は。

”教えてください！ 凄いですね、やっぱり伊藤先生って！”

と、無邪気に尊敬の念を送り。

さすがに悪い気はしなかったのか、伊藤先生は戸惑ったように笑いながらカウンターに二人で行ってしまった。

やっぱ、邪魔された。

そう落ち込みそこなった時、歩き出していた比奈が振り返った。

”梶原先生、資料纏めたらお渡ししますから。少しお時間頂いてもよろしいですか？”

いいに決まってるじゃないか！

とは言えず。

”ゆっくりでいいから。来週の月曜日にでも、もう一度意見を聞かせてもらってもいい？　そこで、資料を頂戴”

そう答えたんですよ、俺。

だっつーのに！！

この時間、印刷する音、眠気覚まし。

比奈、作り終えたな！ 資料！

嬉しいけど、嬉しくない！

無理しやがって……。

っーか、伊藤先生つてばよー。

八つ当たりだとわかってるけど、伊藤先生よー。

俺の比奈に、無理させねえでくんねーかなあ？

14 蛇足・それは、失敗・こたろー（後書き）

間に合わなくて、携帯で投稿><
ミスってなきや、いいんですがー

15 比奈の本音

突如部屋に入り込んできたこたろーちゃんに、あっさりと嘘を見破られた。

作り終えた資料を、さっさと鞆に入れておけばよかったと後悔しても今更遅い。

奪い返そうとした資料を、こたろーちゃんはざっと目を通す。

それは、先生の顔で。

それは、……私の苦手な顔で。

しばらくして、ため息をついた。

「あのな、比奈」

そういつて顔を上げたこたろーちゃんは、じ、と私を見る。

「本当にありがたい。この資料は、生徒が出すようなものじゃないから、助かる」

その言葉が、嬉しくないわけない。

一生懸命やった結果を褒められれば、私だって嬉しい。
でも――

ちらりと視線だけでこたろーちゃんを伺えば、無表情のままの顔が見える。

どうして、ここまで怒るんだろう。

確かに私、こんな時間まで起きて資料作りやってたけど。

でも、ここまで怒られる意味が分からない。

「こたろーちゃん？」

黙ったままむすつとしているこたろーちゃんの名前を呼べば、少し細めた目が私を見下ろす。

ただでさえいつも見下ろされているのに、押しつぶされそうな程の

威圧感は、なんなんだろう？

すぐに目を伏せてこたろーちゃんの出方を、伺う。

どうしたらいいのかわからなかったけど、それでも今のこの雰囲気は怖いと思うから。

「比奈。俺、資料は月曜まででいいって言ったよな？」

「……うん」

「睡眠時間削ってまで、やらせたいわけじゃない。あまり、無理しないであれ」

「無理じゃない……けど」

そう言い返してから、しまった、と口を塞ぐ。

はいはい、って話聞いてればよかった！

余計、オーラが黒くなった！

「うん、ごめん。伊藤先生だろ、比奈が気にしてるの」
ふわりと、雰囲気が柔らかくなって驚いて顔を上げた。

いきなり一八〇度雰囲気が変わったよ！

何、何マジック？？

顔を上げた先のこたろーちゃんは不機嫌そうな表情は変わらないけれど、その感情の矛先が違っていた。

どうやら、伊藤先生に対して怒っていたらしい事に気が付く。

「あ、いや。えっと、別に気にしてるわけじゃ……」

ただ、伊藤先生の纏めた資料がとても見易くて、ちょっと悔しかったからっていうのもある。

早く作りたかったって、それもあるけど。

「あの人、なんでこんなに比奈に競争心を持つかね。無駄だったのに」

こたろーちゃんは手にしていた資料を机の上に置くと、困った様に首元を片手で抑えた。

なんで、なんて。

そんなの、分かってる癖に。

心の中に、もやとした何かが浮かんで唇を噛み締める。

こたろーちゃんは、もてるのだ。

それは、もう、昔から。

だからアプローチ掛けられても、あまり動じない。

うまい具合に流している、ようだ。

そのとばっちりが、私に来てるなんて、知らない癖に。

「夜中に悪かったな、つい、カツとなった。早く寝て……あと、ありがと」

こたろーちゃんは、溜息をつくと私のベッドの上に足を乗せた。

そこからしか、こたろーちゃんちのベランダに戻れないから。

私は少し壁際に身を寄せて、こたろーちゃんが窓枠に手をつくのをじっと目で追う。

「まあ、面倒かもしれないけど、伊藤先生は適当に流してくれ。ただ、目に余るようなら俺に言っで。泣かせるから」

「……なんで？」

泣かせる？

こたろーちゃんから、あんまり聞かない言葉が出てくる。

「どうして、泣かせるの」

そんな事、しなくていい。

幼馴染っていうのを、隠している私にも非があるんだから。知っていれば、もしかしたら私への嫉妬心なんてくだらないもの、持たなくていいんだから。

窓枠に足をかけたまま、怪訝そうにこたろーちゃんがこっちを見た。「どうしてって……。俺の比奈に迷惑かけるような女、泣かせて何が悪い」

首を傾げながらも、窓から身を乗り出してベランダに着地した。その背中に、ぽつりと呟く。

「……幼馴染だからって、そこまで面倒見てくれなくていいよ」そして窓を閉めようとして、呼び止められた。

「ちょっと待て。今の言葉、何？」

そう言いながら伸ばされた手を見て、思わず上体を引いた。たぶん反射みたいな行動だったと、思う。

けれど、それがこたろーちゃんの不機嫌スイッチを入れてしまった。低い声そのまま、名前を呼ばれて肩が震えた。

「確かに幼馴染だからっていうのも少しはあるけどさ。一応これでも、お前にずっと好きだって言ってるんだけど」

むっとしたように眉を顰めると、ベランダの柵越しに身を乗り出してくる。

「比奈、ここでちゃんと言おうか？ 俺の大切な比奈を、守りたいからだよ」

さらりと、言いのける言葉。

「俺は、比奈が好きだ」

まったく、心に響かない言葉。

「お前が俺を幼馴染以上に見てくれるとは思わねえけど、俺の方の気持ちを疑うの、そろそろやめてくんねーかな」

間延びした口調はずつとなりを顰めていて。

正直、ずっとその低い声で話されるのは、妙な緊張感が漂う。

「聞ってる？ 比奈」

そういつて再び伸びてきた指先を、目で追う。

部屋の明かりに照らされて、微かに白く浮かび上がる。

昔は、この指が好きだった。

その掌が、好きだった。

こたろーちゃんがくれる温かさが、大好きだった。

確かに、こたろーちゃんに向けて恋愛感情を持っていたと思う。

けれど、それは。

とつくの昔に、捨てた感情。

だって――

「こたろーちゃんは、嘔吐きだから」

その時の目を見開いたこたろーちゃん表情は、ずっとずっと私を苛むものとなる。

けれど今の私は、そんな事よりも。

記憶の中にいつまでもあり続ける、黒い感情から、目を逸らせなくなっていた。

16 蛇足・比奈の本音・こたろー

「どういうことだ、比奈」

比奈の言葉に、愕然とした。

「お前は俺が比奈のことを好きだと言う、その言葉自体を嘘だと思
ってたってことか」

見つめる先の比奈は、じつと目を伏せたままで。

「俺の事をそう考えられないとか、からかわれているとか、そうい
う風にとっていたんじゃないかって。それ以前に、俺が比奈にそんな嘘
を吐くような男だと、そう思ってたってことか」

照れて、嫌がっているとか。

信じられなくて、からかわれているとか。

そう思われている方が、どれだけいいだろう。

俺が好きだと言っている言葉を、嘘だと、思われていた？

比奈を相手にしてそんな嘘を吐けるほど、俺が軽い男だと？

そんなに、酷い人間だと？

比奈は、何も言わない。

その態度が、俺の言葉を肯定しているようで、苦しい。

「比奈、何か言え」

頼むから、否定して。

照れているだけだって、そう怒鳴って……

けれど、現実には、残酷で。

「こたろーちゃん。私の事なんか、好きじゃないもの」

「好きだよ」

もつと聞きたくない言葉が比奈の口からぶつけられて、思わず即答した。

けれど比奈は、それこそ怪訝そうに首を傾げる。

「お母さん達の手前、そう言ってるだけなのくらい分かってるし」

「違う、本気で……」

「何言ってるの。嘘吐き」

うそ、つき。

その言葉が、胸を抉る。

ドキドキと、不必要なほど鼓動が早くなる。

「比奈こそ、何言ってるんだよ。嘘なんか、俺、吐いてな……」

「それが、嘘だって言ってるの。そんなこと言わなくても、ちゃんと幼馴染してるんだからもういいよ」

「比奈！」

もういいよ。

そんな小さな言葉が、俺の感情を高ぶらせる。

”もう、そんなのどうでも、いいよ”

そう、比奈が言っているのが、読み取れるから。
分かりたくない、けど、伝わってくるから。

苛立った感情のまま名前を呼べば、比奈は微かに笑んだ。

「おやすみ、こたろーちゃん」

「比奈っ」

慌てて手を伸ばしたけれど、寸での差で窓は閉まってしまった。
開けようとしたけれど、鍵も掛けられたくらしくどうにもならない。
比奈の部屋はすぐに電気も消えて、真っ暗になった。

「どういう、事だ？」

さっきまで、普通だったよな？

俺の為の夜更かしだったから、少し注意して、でもすぐに普通に戻して。

ただ、伊藤先生の事気にしてたから、その事で何かあったら俺に言えって……で……

右手で、顔を覆う。

なんでいきなりこーなった？

意味わかんねえ。

俺が、嘔吐き？

なんで？

ベランダの柵に寄りかかったまま、目を瞑る。

高三から、ずっと比奈に好きだと伝えてきた。

本気にしてないだろうとは態度で伝わってきたけれど、それでも少しは恋愛感情があると、存在していると思ってた。

それが、全くの勘違いで。

しかも、俺が五年間も嘘を吐いてきたと思われてて。

それも……ショックだけど――

”もついいよ”

この言葉が、繰り返し俺を苛む。

”もう、こたろーちゃんなんかどうでも、いいよ”

もし、そう言われていたとしたら。

五年間、ずっとそう思われていたとしたら……

窓が閉まる前、微かに笑んだ比奈の表情。

俺、マジでどーでもいい奴だと思われてたわけ……？

そのまま俺は部屋に戻ることもできず、ベランダで座り込んだまま朝を迎えてしまった。

16 蛇足・比奈の本音・こたろー（後書き）

ちよつとシリアス

17 翌日の二人と、先生

いつもの時間、いつもの場所、分厚い本、手元の筆記具。
とても幸せな居場所。

だというのに。

いつもならすぐに本の世界に浸れるのに。

今日、まだこたろーちゃんに会ってない。

カウンターにいた伊藤先生曰く、会議に行ってると言ってたけれど。

頬杖をついて、真横にある窓から外を見る。

既に夕方を迎えてオレンジが紺色に変わっていく、きれいな空。

建物に邪魔されつつ、低い位置に一番星が見えて。

じっと、見つめる。

昨日、こたろーちゃんに言った言葉に、嘘はない。

嘘吐きは……、ずっとずっと私に嘘をついているのはこたろーちゃんの方なんだから。

だから、もういいって、言った。

そんなことをしなくても、こたろーちゃんの幼馴染だからって。

幼馴染で、あり続けるからって。

嘘なのに、私の事好きだなんて思ってもいなくせに、言われ続けるのは私だって辛い。

こたろーちゃんがそんな事を言い出したのは、高校三年。

私は、まだ中学一年生だった。

その時の自分といえば小学生の頃と違う制服を着た自分に、少しこたろーちゃんに近づけたと内心喜んでいた。

……こたろーちゃんが、好きだった。

ずっとずっと、幼い頃から。

多少、憧れに近い想いだっただと言えるかもしれない。

けれど、中学生に上がった後は、恋、と呼べるものになんて変わっていったと思う。

じゃなければ、あんなに苦しくなかった。

こたろーちゃんへの感情を、捨てる事、が。

”……あなたが、ひなちゃん”

未だに忘れることができない、冷たく呼ばれた自分の名前。

”本当に、ひな、ね”

初めて、自分の名前が嫌になった。

「比奈」

記憶とオーバーラップするように呼ばれた名前に、自分でもおかしいほど体が震えた。

頬杖をついていた顔を勢いよく上げて、声のした方を見る。

あまりの驚きに見開いてしまった視界には、同じようにしているこたろーちゃんがいた。

「こたろー……ちゃん」

無意識に零れた声に、こたろーちゃんが息を吐いて瞬きを繰り返す。

「どうした比奈ー。驚きすぎだろう？」

いつもの間延びした声と、柔らかい表情。

……柔らかく、そう努めようとしている、表情だ。

ツキリと胸が痛くなって、思わず目を手元の本に落とす。

「どうしたの、こたろーちゃ……梶原先生」

いけない、ここは図書室だった。

不用意に名前を呼んでいい場所じゃない。

聞かれたのが佳苗だったからよかったものの、幼馴染を隠しているはずの私が気を抜いちゃいけない。

こたろーちゃんは眉を顰めると、机の向こう側に立った。

「昨日の資料、貰おうと思って。持ってきてくれたー？」

「ごめん、忘れた」

反射的に、即答してしまった。

本当は、ちゃんと持ってきている。

机の横に置いてある鞆の中に、ちゃんと入ってる。

でも、今は。

こたろーちゃんと、あまり話していたくなかった。

「そっかー、うん、別に急がないし。気にすんなー」

いつもの間延びした声音だけれど、少し緊張感を含んでいるのが感じ取れる。

私の出方を、伺っているような。

それに気づきながらも、簡単に謝罪だけしてぺらりと本のページを捲る。

今日、一文字も頭に入れていない、その本のページを。

その音がきっかけになったのか、こたろーちゃんの掌が机に置かれた。

トンと軽い音がして、同時に上体を屈めて近づいてくるのが分かる。

ドクドクと不快なほど、鼓動が早くなっていく。

今、きつと、顔……青い。

「比奈、昨日の話だけど……」

「梶原先生」

違う意味で、肩が跳ねる。

こたろーちゃんの言葉を遮った、伊藤先生の声。

斜め上で、小さくこたろーちゃんが息を吐いて、それが耳元を通り過ぎた。

「どうしました、伊藤先生」

それでも柔らかな笑みをきつと作ったのだろうこたろーちゃんが、上体を戻しながら体を後ろへ捻る。

パタパタと聞こえるのは、伊藤先生が愛用しているナースサンダル。

ゆっくりと顔を上げれば、すぐ傍まで来ていた伊藤先生と目があつた。

こたろーちゃんがいるからか表情は変わらないけれど、それでも視線は冷たい。

「ええ、昨日の資料の事ですけれど」

その言葉に手元を見れば、数枚の紙。

ああ、と理解する。

こたろーちゃんにも伊藤先生の言わんとしていることが伝わったのか、同じように手元に視線を向けている。

「作ってきたので、どうぞ？」

案の定、こたろーちゃんに向けて差し出されたそれは、昨日私が夜に作っていたものと似ている資料。

元々の資料が手元にあることに、たぶん気が付いたんだろう。

昨日最初に私が持つてきてこたろーちゃんや伊藤先生に見せた資料は、元々彼女にも提出したものだったのだから。

こたろーちゃんは差し出された資料を一瞥して、すぐに顔を上げた。その表情が無に近いことに気が付いて、私は慌ててその資料を奪い去るように手に取る。

「委員長？」

非難がましい伊藤先生の声が聞こえたけれど、私は構わずにその資料に目を通すふりをした。

「凄いですね！ やっぱり、教えて頂いても足元に及ばないです、私なんて！」

「え？」

まさかそう来るとは思わなかった。たろう伊藤先生が、呆けたように声を出す。

「昨日作ってはみたんですが、どうにもうまくいなくて！ 作り直そうと思つて、捨てちゃったんですよ！」

「は？」

今度は、こたろーちゃん。

その声に一瞬肝が冷えたけど、そんなこと気にしてられない。

伊藤先生を見上げて、満面の笑みを浮かべた。

「正直難しくて、どうしようって思ってたんです」

そう言い放つと、その資料をこたろーちゃんに押し付けた。

呆気にとられたように私を見ていたこたろーちゃんは、勢いに押されたのか何も言わずそれを受け取る。

「やっぱり、私には無理でした。伊藤先生、ありがとうございます！」

「あ、えと……。そう言ってもらえれば、嬉しいわ」
本当に嬉しそうに、笑ってくれるから。

ああ、そうだ。

ナースサンダルがちらりと、視界の端に映って思い出す。

履きやすくて、足も痛くならないし、重宝するのよ！ と、そういえば一学期にそんな事言ってた。

そんなことを話すくらい、伊藤先生は私を嫌ってはいなかった。

ガリ勉スタイルを指摘されることはあっても、それは苦笑を伴うものだった。

今みたいに、冷たい視線を向けられることなんて、なかったんだ。

伊藤先生がそんな態度をとるようになったのは、私のせい。

中途半端に、こたろーちゃんの近くにいますから。

捨てたはずの感情が、まだ欠片くらいは心の片隅に残ってたのかもしれない。

だから、こたろーちゃんを口では拒否しながらも、態度が伴ってなかったんだ。

どこまでも、どこまでも、私は”ひな”のまんまで。
それでもこれだけは、上手くなっただ。

「もつそろそろ鍵当番が見回りに来るので、私、帰りますね」

にっこりと笑って、自分の感情を隠すこと、それだけは。

17 翌日の二人と、先生（後書き）

今後の更新ですが、隔日に変えていこうと思っています。
よろしく願います m - - m

18 蛇足・翌日の二人と、先生・こたろー

学校に喫煙室は、当たり前だけどない。

けれど教師の中には愛煙家もいるので、校舎からほど近い場所にある通称物置小屋の一角に、喫煙室に指定されている場所がある。

図書室で比奈が帰っていくのを内心呆然と見送った俺は、喫煙室の窓際でぼけーっと煙草を吸っていた。

昨日、比奈に言われた言葉が、脳裏から消えない。
おやすみと言った時の笑みが、ちらつく。

おかしい。

比奈の嘘なら、見抜ける自信がある。

でもあの顔は、嘘をついている表情じゃなかった。

眉間に皺、寄ってなかったし。

じゃあ本音なのかと思えば、さっきの図書室の比奈。

まったく本に没頭できていなかった。

比奈にとっては当たり前のように俺に嘔吐きと告げたはずなのに、何を考え込んでいるんだろう。

それとも、本当に俺はどうでもよくて。

何か違う悩みがある？

堂々巡りの思考は、まったく答えを導き出してくれない。

昨日の事を聞こうにも家に帰らないと流石にちゃんと話はできない

だろうし、しかもフライングでさっき聞こうとしたけれど拒否のオラが漂っていた。

伊藤先生に邪魔されたのが直接的な原因だったけれど、仮に彼女が来なくても比奈は何も答えてはくれなかったと思う。

「どーすつか、なー」

比奈が、何を考えているのかわからない。

幼馴染だから、俺が胡坐をかきすぎたのか？

比奈の事が好きなのは、俺の本心なのに。

確かに幼い頃、比奈は庇護のみの対象だった。

五歳年下の、隣の子。

生まれた時から知ってる、家族のような存在。

妹、幼馴染、手のかかる元気な子供。

いいところ、そこらが俺の比奈に対する感情だった。

それが、恋愛感情に変わったのは、俺が高三、比奈が中学校に上がった年。

外を駆けずり回って楽しそうに遊んでいた比奈が、突然大人びた。

それは、制服になったからというわけじゃなくて。

いや、それによる効果もあったのかもしれないけれど、やはりそれだけじゃなかった。

いつも自分が通っていた公立図書館で本を読む比奈を見かけるよう

になると、俺の中で、比奈への感情が少しずつ変わってきていることに気が付いた。
あんなに子供だった人間が、大人へと変化していく様は、幼い頃から知っているはずの人間なのに、まったく違う不可解な気持ちを抱かされた。

何でも知っていると思っていた、自分の認識の甘さ。
近くにすぎたからこそその、勘違い。

知らないうちに比奈は自分の世界を作り上げて、どんどん変わっていく。

俺の知らない比奈が増えていくのを見ていて、こみ上げる焦燥感に最初愕然とした。

だって。

十八歳と十三歳。

五歳差は、この年頃の男女にとっても大きい溝。

これが成人して社会人になってしまえば、せめて大学生になってしまえば気にするものではなくなるんだろうけれど。

高三の男が、中一の女子にそういった目を向けることが、……俺が比奈を見るその目が凄く汚く見えた。

守ってやるのが当たり前だった比奈を、男の目で見ていたことに気が付きたくなかった。

認めたくなくて。

どうしても、それを認めたくなくて。

面だけは良く親が生んでくれたから、手当たり次第、女と付き合った。

最低だったと思う。

今思い出だしても、あの頃の自分は最低な人間だった。

気持ちもない、心もない、そんな相手と付き合うことで自分の想いを否定したかった。

一時の気の迷いだと、そう自分の感情を決めつけて。

どうにか感情の矛先を、違う誰かに向けようと必死になった。

とにかく、誰でもよかった。

比奈じゃなければ、誰でもよかった。

幼い頃から守ってきた比奈を、どうにかして、俺から守りたかった。

「辛気くせえ面、してんじゃねーよ」

後ろから小突かれて、持っていた煙草の灰が机に落ちる。

いつの間にかほとんど灰に変わっていたことに気づいて、指に挟んでいた煙草を灰皿に落とした。

「痛いですよ、片山せんせー」

「ちゃんと呼べよ、後輩」

顔を上げれば、傍の椅子に腰を掛ける片山先生が呆れた顔をして俺を見ていた。

そのまま手に持っていた缶珈琲を、机に置く。

「ラッキー、奢り？」

「百円を奢りだと喜んでくれるんなら、やつすいもんだ」

ニヤリ、という呼称の方が似合う笑みを浮かべて、片山先生はもう一缶持っていた珈琲のプルタブを開けた。

「悩み多き年頃か？ 二十三歳にもなつて」

「永遠の十八歳」

「脳味噌だけはな」

ぽんぽんと会話を交わす片山先生は、俺の高三の時の担任。

俺が一年間フリーターをする事になったのを聞いて、今回の臨採を教えてくれた愛すべき担任。

「やめろ、うぜえ。気持ち悪い」

声に、出ていたようだ。

「片山先生さー。もしかしてと思うけど、俺の事比奈に言った？」
藁にも縊りたい気持ちで、問いかける。

比奈が、どうしていきなりあんな事を言い出したのかわからない。
けれど俺の事で比奈が知らないのは、学校の中の事だけだから。
もしかしたら、最低な高三時代を知られたから、俺の気持ちを信じられないのかと思いついた。

片山先生は面倒そうに眉間に皺を寄せると、珈琲に口をつける。

そうして、あー、と間抜けな声を上げて視線をさまよわせた。

「なんだ、お前の鬼畜所業、ばれたのか」

「やっぱ、ばらしたの！？」

一気に緊張感が体を襲い、片山先生の方に身を乗り出す。

「言つてねーし、今の言葉そんな意味じゃねーだろーよ。国語免許持ちが、どんな読解力だ」

ぱしんと頭を軽く叩かれて、縋るようにその次の言葉を催促する。

「え、じゃあ」

「大体お前の幼馴染に言うくらいなら、伊藤先生にばらして目を覚まさせる」

「なんだ、……比奈にばれた訳じゃないのか」

最後の方のくだりはどうでもいい。

とりあえず、比奈に知られてなきやどうでもいい。

ああ、でもそうしたら謎が解けない。

「伊藤先生もあんな感じじゃなかったのに、お前が来てから変わっちゃまったよな」。俺達独身男性教師の癒しの対象が」

じとーとした視線を向けられても、俺のせいじゃないし。

「つーかさ、幼馴染に絶対学校で手出すなよ。ていうか、せめて教師やってる間は自宅でも自重しろ。まさかお前の悩みのタネが、うちの学校にいるとは思わなかった。知ってたら、臨探の話しなかったのに」

「今更」

軽く返せば、じろりと睨まれる。

「面倒事は嫌だからな。問題になったら、俺は知らぬ存ぜぬで通すからな」

「本当にそうしそう。まあ、今そんな状況じゃないから安心してよ、先生」

はぁっと、大きく息を吐き出せば、どうした？ とでもいうように、片山先生が片眉を上げる。

数少ない、俺の心情を知る人。

俺が高三の時、あまりにも阿呆な生活をおくり出したのを見て、真剣に止めてくれた人。

そういう意味で、俺の弱音を吐き出させてくれる、唯一の人。

「比奈に、嘔吐きって言われた」

「嘔吐きい？」

缶珈琲の飲み口に口をつけたまま、片山先生が首を傾げた。
俺は顔を伏せたまま、頷いて、ため息をつく。

「俺の気持ちは、比奈にとって嘔なんだって、さ」

19 そして、夜

「比奈、ちよつと話があるんだけどー」

こたろーちゃんよりも先に夕食を終えて部屋にいた私は、ノックと共に聞こえてきた声に、一瞬身を強張らせた。

そして自分の手元を見て、傍にあった本をその上に置く。

「なあに、こたろーちゃん」

いつも通りそつけなく返答すれば、おずおずというようにドアがゆつくりと開いてこたろーちゃんが顔を出した。

「今、いいかー？」

「外でなら」

座っていた椅子から立ち上がると、廊下でこたろーちゃんが困った顔をする。

「外、寒いぞ？ 風邪ひかせたくないし……」

その言葉を聞き流しながら、ふと気が付いてこたろーちゃんの傍に
よる。

「風邪つていえば、こたろーちゃん。ちよつと顔、赤くない？」

「へ？」

そういつて額に手を伸ばせば、掌越しに伝わってくる高い体温に少し驚いた。

「ちよつと、熱あるしつ。奈津さーん！」

こたろーちゃんの脇を抜けて、階下にいる奈津さんに声をかける。

何？ と返答してきた奈津さんに、階段を降りながら話しかけた。

「こたろーちゃん、風邪っぽい」

後ろから少し遅れて階段を下りてきたこたろーちゃんが、慌てたように声を上げる。

「いや、母さん。大丈夫、平気……」

「うつさい、黙れアホ息子」

リビングから廊下に出てきた奈津さんは、叩くようにこたろーちゃんの額に手を当てて眉間にしわを寄せた。

そうして深く溜息をついてから、その手を玄関の方に向けて指差す。

「病人は、こつちにくんな。社会人にもなつて、体調管理もできないのか。馬鹿こた」

「まあ。アホ息子に馬鹿こたに変態こたろーちゃん、いろんな名前があつて楽しいわねー」

「一つ、勝手に増やさないでくれませんか？ 春香さん」

続いて出てきたお母さんの言い草に、こたろーちゃんががつくりと肩を落としたまま懇願する。

それを受けながらも一度リビングに引つ込んだお母さんが、ビニール袋を下げて再び顔を出した。

「比奈」

こたろーちゃんの後ろでぼけつと話を聞いていた私は、いきなり呼ばれてお母さんを見る。

「何？」

問いかければ、邪気のない満面の笑みでその袋を私に押し付けた。

意味も分からずそれを受け取ると、おかあさんと奈津さんはリビングへと戻る。

「え、ちよつと、何？」

定位置であるダイニングのそれぞれの椅子に腰を下ろすと、ひらひらと手を振った。

「小太郎くんの面倒、見てあげなさい？ 私達、まだ用事があるの」

「は？」

なんで私が！

そう言おうとしたけれど、あっさりと奈津さんに先を越された。

「こたの馬鹿つてば、昨日の夜ベランダでタバコ吸ったまま寝たみたいなのよねー。あんまりにも馬鹿すぎてかーさん面倒見たくないから、ごめんねー比奈ちゃん。用事が終わったら、すぐに帰るから」
「……う」

流石に奈津さんにまで頼まれて、嫌とは言えない。

しかも、風邪の理由が昨日の夜の出来事だと、知ってしまったからには。

諦めるようにため息をつく、傍で困ったように私を見下ろしてくるこたろーちゃんと目を合わさないように歩き出した。

「比奈」

慌てて歩き出すこたろーちゃんを無視して、さっさと靴を履いて玄関を出る。

ものの数秒の距離にあるこたろーちゃんちの玄関を、本人に開けてもらって久しぶりにその玄関をくぐった。

「お邪魔します」

誰もいないのにお邪魔も何もないけれど、習慣になっているものは仕方ない。

靴を脱いで家になると、やっぱりまだ困惑したようなこたろーちゃんを見上げてため息をついた。

「うがい手洗い後、部屋へ直行」

「へ？ いや、せめて風呂……」

「そんなもん、奈津さん帰ってきてからにしてよ」

私の言葉の意味に気が付いたのか、ああそうか、とぼそぼそ呟いて洗面所へとこたろーちゃんは向かった。

私はキッチンに入って、お湯を沸かす。
っていうか……

「奈津さん。生活感、なさすぎ」

ヤカンとポット、急須や茶葉はあるけれど。

鍋とかまな板とか、きれいに仕舞われている。

ほとんどうちにご飯食べに来てるから、必要ないのかもしれないけど。

思わず苦笑して、お母さんに持たされた袋の中身を取り出した。

冷感シート、スポーツドリンク、体温計に風邪薬。

下の方にゆず茶の小瓶が入っているのが見えて、目を細める。

私が風邪をひいた時の、必需品。

のどに優しいのだ。

洗面所から戻ってきたこたろーちゃんを部屋へと急ぎ立てて、マグカップにお湯を注いで少し冷ます。

あまったお湯をポットに入れて、そのままダイニングテーブルに置いた。

本当はゆず茶を飲みたい衝動に駆られているけれど、そんなことしたらここにいて時間が長くなる。

こたろーちゃんが何を聞きたいのか、何を話したいのか想像がつくだけに、私は早く帰りたいかった。

「薬」

久しぶりの、こたろーちゃんの部屋は……男臭い。

いや男なんだから仕方ないと言われればそうなんだけど、ね。

男の人にとっては、そんなこと言われてもーて感じだろう。

女の人も、男の人から女臭いとか思われてるんだろうか。

そんなくだらないことを考えながら、現実逃避してどうすると内心溜息をついた。

モノトーン基調の家具の中、こたろーちゃんがいるベッドにかかるのは青いカバー。

それが、変に目に鮮やかに目に映った。

お盆にのせた薬とマグカップをベッドサイドの机に置けば、上体をベッドヘッドに持たせていたこたろーちゃんがすぐに手を伸ばすと黙ったままそれを飲み干す。

「比奈」

呼ばれた声音で、思わず体が強張る。

「比奈、ちゃんと話したいんだけど」

薬を飲んだのを確認したらさっさと帰ろうと思っていた私に対して、それを阻止するべく何か言い出す前にこたろーちゃんは薬を飲んだらしかった。

お互いに、お互いの考えていることが、大体わかってしまう。

幼馴染は、はたして、面倒だ。

20 蛇足・そして、夜・こたろー

呼びかけた比奈は、目の前で固まっている。
なんでそんなに緊張するのだろう。

比奈は、何をそんなに怯えてるんだ？

放課後。

泣き言を零した俺に、片山先生は辛辣な一言を言い放った。

「自業自得。お前があの時、人の心を弄んだ報いだよ」

抉られた。

比奈の嘔吐き発言でも抉られたけど、片山先生の言葉は、昨日の傷跡をそっくりそのまま同じ位抉り取った。

「自分が必死だからって、人の気持ちを踏みにじったわけだからな」
「……」

何も言い返せない。

あまりにも情けない顔をしていたのだろう。

片山先生は吸っていた煙草を灰皿に押し付けて火を消すと、珈琲の缶を手取る。

「お前、幼馴染とちゃんと向き合ったこと、あるか？」

「へ？」

向き合ったこと？

片山先生はぐびりと一口珈琲を飲み下すと、それを持ったまま窓の外に目を向けた。

「お前の高三は、最低だった。俺から見ても、最悪な男だったな」

「……挟らないでよ、これ以上」

自分でも自覚しているのに、客観的に言われるこのきつさ。

「ま、それだけお前も真剣だったって事だろ？ その幼馴染の事」
そう言われて、口を噤む。

そりゃ、本当にあの頃は。

思い詰めていたし、思考はほぼ無限ループだった。

早ければ数日、長くても数週間と持たない恋愛関係ばかりを繰り返して、授業もテストも適当になった。

そのせいで内申点落とされて、比奈と同じように高校入学から推薦を目指していた俺は、冬以降、受験で苦勞する羽目にもなったのだが。

でも、夏が過ぎる頃。

自分の気持ちに気が付いてから、数か月。

あれは、比奈が俺の知らないたぶん同級生の男と歩いているのを見た時。

もう、無理だと悟った。

どうあがいても、俺が俺を止めることはできないと。

比奈の幸せを傍で見守ろうとかそんなこと考えてたけど、絶対に無理だと気づかされた。

比奈が好きで、比奈を独占したくて。
抑えていたから、余計昂ぶる感情。

俺の感情をぶつけて、怖がる比奈を見たくなかった。
比奈が、俺を嫌いになるのが怖かった。

俺は、俺から比奈を守っているつもりで、比奈に嫌われるのが怖かっただけなんだ。

でも、いい。

こんな気持ちのまま、比奈を見続けるくらいなら。
全力で、比奈に好きだと伝えよう。

拒否されたなら。心から、本気で嫌われたなら。
ここからいなくなればいいと、そう、思った。

比奈が他の誰かのものになるのを見ている位なら、幼馴染を続けられなくなった方が、その方がいいと。
いつそ、その方が救われる。

俺は、選択した。

考え込む俺を黙って見ていた片山先生は新しく出した煙草を銜えろと、火を付けて大きく息を吐きだした。

「お前だつて、まあ、辛かったらうけどさ。その心情、ちゃんと幼馴染に伝えたか？ 単に、好きだー好きだーって言ってただけじゃないのか？ 自分本位で、気持ちを伝えていただけじゃないのか？」

「それは……っ」

口を開いた俺を、片山先生は視線で黙らせる。

「お前はお前なりに、悩んで出した答えだ。真剣なのはわかる。けど幼馴染とってはどうか？ いきなり好意を前面に押し出され始めたら、戸惑うし誰も信じねえよ」

そう言われて、俺は何も言えなかった。

黙り込んでしまった俺の頭を、片山先生は軽く叩いてニヤリと笑う。

「今からでも、せめてちゃんと向き合えよ。あれだけ悩みぬいた相手、簡単に諦めんな」

「……手、出しちゃまずいんじゃないっけ」

「当たり前だ、馬鹿。口を出せ、口を」

口でも物理的に出すなよ、と笑うと、煙草を消して片山先生は喫煙室を出て行った。

だから。

ちゃんと、まじめに、比奈に想いを伝えようと思って、るんだけど。強張った表情のまま俺を見る比奈が、凄く辛そうで。

何でそこまで、苦しそうにするのか意味が分からなくて。

でも、伝えるって決めたから。

こくりとつばを飲み込んでから、口を開いた。

「昨日は、怒って悪かった」

「……別に、大丈夫」

とりあえず会話のきっかけとして昨日の事を謝ってみたけれど、

反応は、薄い。

帰ったそうにちらりとドアの方に視線を向けた比奈の手を、手を伸ばしてぎゅっと掴む。

ぴくりと肩を震わせた比奈を視界に収めながら、それでも俺は自分の気持ちを伝えたかった。

好き、という気持ちが、嘘だと思われたままではいたくなかった。

まさか、それが。

比奈を追い詰めるとは知らずに。

「比奈。俺、本当にお前の事が好きなんだ」

一言一言を噛み締めるように、比奈に伝える。

いつもの、間延びした口調は止めて。

自分の欲望から鈍くなる為に、またそれ以上に比奈を怖がらせまいとして使っていた話し方ではなく、まじめな口調で。

比奈は、何も言わずに目を伏せたまま俺の言葉を聞いていた。

その反応の無さに、焦れるような感情が頭をもたげる。

「ちゃんと、向き合ってこなかったから、比奈に信じて貰えないんだって気が付いた。だから、比奈」

掴んだ手をに、力を込める。

「信じてくれ。俺は、比奈が好きだ」

21 一方通行

真剣なその言葉を聞いた時、私の脳裏に浮かんだのは、とても冷めた言葉だった。

……そうやって、他の人にも伝えてきたの？

何も言えず、じつと自分の足元を見つめ続けた。

「きつと、ずっと前から比奈の事が好きだった。でも、ちゃんと気が付いたのは高三で。だから、そこから気持ちを伝えてきた。……つもりだった」

冷めた気持ちで聞いている私を置いてけぼりにしたまま、こたろーちゃんは話し続けてる。

「最初は、年齢差に戸惑った。でも、やっぱり諦めきれなくて」

そのまま、自分の気持ちを、私への想いをつらつらと話し続けるこたろーちゃん。

でも、言わないんだね。

高三の時、自分が何をしていたかなんて。

そして、聞かないんだね。

その時、私がどう思っていたかなんて。

自分の気持ちだけで突っ走って、私を置いてけぼりにする――

ねえ。

何も言わないで、終わりにするの？

こたろーちゃん。そんなんじゃ、信じたくても信じられないよ。

穏やかで優しいこたろーちゃんは、私を好きになったと言ったその時、何、してた？

高校三年生。

私が中学生になった年。

その年、こたろーちゃんが私の事を好きになったというのならば。

思い出す、綺麗な女の人。
言われた言葉。

心を決る、辛辣な願い。

ねえ、こたろーちゃん。

私は、その年にあなたを好きでいる事を諦めたんだよ。

21 一方通行（後書き）

今日は短いです。

そして明日も短い予定^^^；

22 蛇足・一方通行・こたろー

この歳になって、自分の気持ちを正直に口にするということが、どれだけ羞恥を煽るものと心底理解した。

恥かしい。

青い春の内に、さっさと伝えてしまえばよかった。

青いことしたって、若さ故の〜で少しは軽減されるのにつ！

それでもその羞恥心こそ、昔の自分の所業の報いだともいうように乗り越え踏み越え、今までの自分を比奈に曝け出した。
年上なのに、馬鹿でごめん。

ただ、流石に高三の所業だけは口に出来なかった。
穴を掘って、永久に封印したい。

永久凍土に捨て去りたい。

あの頃の自分を、自分の中から抹消したい位の過去。
それを伝える事だけは、流石にできなかった。

何とか伝えたいことを、話し終える。

緊張していたのか、口の中がカラカラで。

意識を切り替えるように大きく息を吐き出した後、懇願するように比奈の目を見た。

「比奈。俺の気持ち、伝わった……？」

びくり、と比奈の肩が震えた。

小さく息を吐き出す音が聞こえた後、比奈は伏せていた眼を微かに上げると、俺が握ったままだった手をくんと引く。

「あ、ごめん」

つい握ったまま話し続けていたことに気が付いて、慌てて手を放した。

両手を膝の上に投げ出したまま、比奈の言葉を待つ。

比奈はゆっくりと瞼を上げて、俺の目を見た。

「こたろーちゃん」

「……はい」

いつにない低い声に、思わず返事をする。

比奈はそんな俺を見て、ふ、と笑うと綺麗な笑みを浮かべた。

昔のような、可愛い笑顔じゃない。

大人の、綺麗な笑み。

知らず、感情が高ぶる。

もしかして、もしかして……これは……

期待に満ちた、目をしていたと思う。

比奈は一瞬目を細めると、再び口角を上げた。

「私達は、幼馴染でいいんだよ」

「え？」

それだけ告げると固まったまま何も言えない俺を置いて、比奈は部屋から出て行った。

……幼馴染で、いいんだよ？

返事なのかなんなのか分からないその言葉を、脳裏で繰り返す。

……幼馴染で、いいんだよ

「え、と」

ぽつかりと、心に空洞ができたように、何も浮かんでこない。

ただ、ただ――

綺麗に微笑んだ、比奈の表情だけが目に焼き付いていた。

22 蛇足・一方通行・こたろー（後書き）

短いので、連日更新してみました^^

23 それぞれの数日間

「委員長、どしたの？」

突然目の前が真っ暗になって、額の痛みとともに眼鏡が顔に食い込む。

後頭部を押さえ付けていた手がぼんぼんと頭を軽く叩いて、離れていった。

……あのさ、眼鏡掛けてる人なら分かってくれと思うんだけどさ。鼻当て？　ってーの？　本当の名称知らないけど、鼻当てがね。顔に食い込むとね。地味に痛いわけね？

「副委員長……」

顔を上げて眼鏡を取れば、目の前の椅子に座った佳苗が少し目を見開いた。

近視の強い私には、そこまでよく見えないけれど。

自分の皮脂が付いたレンズを、眼鏡拭きでキュキュツと磨く。

洋服の裾とか袖とかで拭くのは楽だけど、コーティングに傷がついちやってレンズが駄目になっちゃうからねー。

そんなしょうもないことを考えつつ拭き終えた眼鏡をかければ、まだ固まったままの佳苗がそこにいた。

「何してるの……って、佳苗？　聞いているの？　かーなーえー？」
話しかけても反応を示さない佳苗に焦れて目の前で掌を振れば、信じられない、と呟かれた。

「何、この王道設定。ガリ勉女が眼鏡外したら可愛かったとか、ど

この話？ ベタでしょ、ベタすぎるでしょ？？」

ぶつぶつと呪いのように言葉を続ける佳苗を馬鹿にしたような目で見れば、でも、と続けた。

「あ、別に美少女とか言っていないからね。思ってたより。思ってたより可愛かっただけの驚きだから。流石にそこまで王道設定嫌だし？ まあほら、スタートがマイナスだから、五十%くらい上昇すればいい感じに見えるっていうか……ギャップ？」

……表情をいつも通りに戻してコテンと首を傾げる様は、殴ってあげたいくらい魅力的だわ（はあと）。

そんな不穏な私の空気を察知したのか、佳苗は前のめりだった上体を後ろに引いた。

「んで、どーしたの委員長。ここ数日、梶原先生と不仲ね。夫婦喧嘩？」

「まず、最後の不適切な言葉、撤回して頂戴」

人が求めているのにそれをハイハイという適当返事で流して、佳苗は机に頬杖ついた。

「だって今まで比奈が一人でいて、梶原先生が寄ってこないのとか見たことなかったし」

「何それ。大体、司書教諭が生徒にホイホイ近づいてたらおかしいでしょ？」

「んじゃ、今までおかしかったのに、何いきなり正常になってんの？」

……、これだから読書大好き文系人間が寄ると……

思わず、眉間を指先で抑える。

言い回しも言葉選びも、自分で言うのもなんだけど多種多様で素早いと思う。

本を読んでいれば、それだけいろいろな言い回しにも言葉にも慣れるというものだ。

要するに。

同じ意味の質問を口にするのに、幾通りもの言い方ができるというわけさ。

思わず面倒くさいと内心呟いてから、佳苗に目を向けた。

「あのね、幼馴染とはいえ学校でいつも通りに振る舞うのはおかしいと思うんだけど。だから、ちゃんと教師と生徒っていう線引きしようと思って」

「は？ そんなの、委員長ずつとしてたじゃん。それを乗り越えて傍に寄っていく梶原先生見てるのが面白かったんだから。なのに、何？ 梶原先生が、なんかよそよしくなっちゃってさー。傍観者のつまんない」

なぜ、傍観者に楽しい日々を送らねばならん。

「今までの梶原先生の態度の方が、おかしかったんだって。やっと、大人の対応になってくれて私はホッとしてるんだから」

手元のノートを、ぱたりとしめた。

「ふーん」

なんだか反応の薄い返答をする佳苗の前に、少しバツの悪い気分になつて横に置いておいた鞆に文具類をしまいこむ。

いろいろと突っ込まれる前に、さっさと帰ろう。

聞かれたい話は、一つもないし。

「あれ、帰るの？」

物凄く棒読みな佳苗の言葉。

頭の中を、見透かされている気分になる。

「帰るよ」

そう一言返して、私は図書室を後にした。

高校に入っつと続けていた、放課後の図書室通い。

用事があるとき以外は、必ず図書室を施錠するまで本を読んでいたけれど。

初めて、その習慣を放棄した。

24 蛇足・それぞれの数日間・こたろー

「うざい、めんどくさい」

「片山先生ー」

喫煙室に入ってきた途端、嫌そうな顔をして踵を返そうとした片山先生の腕を掴んで引き止めた。

「何で最近、俺から逃げるのさ」

「お前の顔が気持ち悪いからだよ」

失礼な。

勢いで出ていこうとしていた片山先生は俺のしつこさに負けたのか、諦めたように肩を落とすといつもの定位置に腰を下ろした。

「で、なんだよ。なんなんだよ。大体、お前生徒じゃねーんだから俺を頼るなよ」

イライラしたように煙草を銜える片山先生を、恨みがましそうに睨む。

「普通さ、卒業してもお前達は俺の生徒だ！　とか、そんなこと言うんじゃないの？」

「いわねーよ。どれだけこっちに責任背負わせばいいんだ。ふざけんな」

そういいながらも、実はちゃんと面倒みていることを俺は知っている。

臨探の事を、俺に教えた事でも証明されてるしね。

「顔が気持ち悪いから、お前と面合わせるの避けてたのによー。煙草の誘惑に負けたし」

心底残念そうに煙を吐き出す片山先生は、持っていた缶珈琲の蓋を

開けながら俺を見た。

「で、なんだ。伝えられなかったのか。それとも、振られたのか」
「うっわー、直球」

そう言いながら、座っていた椅子に戻って机に上体を伏せた。
両腕に顎をのせて、目を伏せる。

「……幼馴染でいいんだよ」

ぼつり、と呟く。

片山先生はよく聞こえなかったのか、問い返すような視線で俺を見る。

「幼馴染でいいって、そう言われたんですよ」

「振られたんじゃない。ごしゅーしょーさま」

「即答かよ！」

がばつと顔を上げれば、眉間に皺を寄せたまま煙草を口に銜える片山先生の姿。

「即答だろ。他にどんな言いようがある。ナンテマア、カワイソウ
二」

「棒読みやめてーっ！」

再び、机に伏せた。

「っーか、その割に深刻に悩んだりしないんだな。ふざけてる様に見えるのは、俺だけか？ それとも、そうでもないと保ってらねーのか？」

その言葉に、ピクリと肩が動く。

鼻で笑う声が聞こえて、青い青いとのたまわれた。

「大方拒絶されたら諦めるとか決心しておきながら、いざ拒否されたら余計に自分のものにしたくなって、手出しそつで怖いんだろ」

「その、人の深層心理を的確に抉り出す手法は、どこで学んだわけですか」

「お前、幼馴染に近づくな。なんかあったら、元担任とか言っただけで槍玉にあげられそうだし」

ああ、否定できないだけに言い返せない。

諦めると、決めていた。

比奈に想いを伝えて、それでもダメだった場合は、いつそすつきりするとか思ってたのに。

実際は、真逆。

”幼馴染でいいんだよ”という、何ともオブラートに包んだような言われ方をしたせいで、余計諦めきれなくなった。

嫌いじゃないなら、好きでもないけど、嫌いでもないならそこに望みを見出してしまった。

衝動的に手を出しそうで、自分が怖い。

ぼん、と頭に掌が乗っかる。

「お前、良くも悪くも素直なんだよな。で、”幼馴染でいいんだよ”って事は、お前の鬼畜所業、彼女は許してくれたのかよ」

「は？ わけないじゃん」

思わず、がばりと体を起こす。

頭から離れた手を宙に浮かせたまま、片山先生が怪訝そうに首を傾げた。

「許される、わけないじゃん？」
「いや。言う、わけないじゃん」

それを聞いた片山先生は、眉を顰めた後、ふうんと呟いて煙草を銜えた。

口端から上る細い煙が、ゆっくりと消えていく。

「この期に及んで、自分を守るっつー奴？」

「いや、守るっっていうか……。別に言わなくてもいい話だろ？ これ以上、幻滅されたくないし」

「すでに底辺だから、大丈夫だろ」

それ、まったく大丈夫って言えないんすけどー、先生。

「底辺突き破って、奈落に落ちたら責任とってくれるんですかー」

「責任とれる大人が、甘ったれたこと言ってんじゃねーよ」

ぶはあつと煙を吐き出した片山先生が、ふと顔を上げて一点に視線を向けた。

「あれ、お前の幼馴染じゃないか。えれー、早いな」

「え？」

その声に同じ方に視線を向けると、少し離れた場所を比奈が横切っ
ていくのが見えた。

「あれ、ホントだ。図書室閉めるまでいないの、珍しい……」

いつも必ず下校時刻まで、最悪最終下校まで居座る比奈が。

「お前のせいかなー」

「……っ」

びくつと、肩を揺らす。

「お前が阿呆な事言ったから、幼馴染ちゃん、落ち込んでんじゃねーの？」

「落ち込みたいの、俺の方だと思っただけど」

なんで振った方が、落ち込むんだよ。

じろりと睨みあげれば、煙草を灰皿に押し付けている姿。

「お前が、お前を守ったからだろ。案外、ばれてんじゃねーの？」
「え？」

片山先生は椅子から立ち上がって、両手を上げて体を伸ばした。

「てーかさ。お前、自分の気持ち言うだけで、幼馴染ちゃんの気持ち、聞いたことあんの？ 変に断らない方が、俺には怪しく思えるけどね」

比奈の気持ち？

首を傾げて考え込む。

「……言われてみれば、ないかも」

比奈、あんまり反応してくれないし。

「ホントお前、まだまだ子供だなー。青いわー」

「……よし、聞いてくる！」

ガタツと大きな音を立てて立ち上がる。

「あ？ お前仕事中」

突然立ち上がった俺に驚いたように目を見開く片山先生に、大丈夫と返した。

「すぐ戻るし、声かけて後で行くことだけとりあえず伝えてくる！」

そのまま、喫煙室を飛び出した。

「……そういうの、プライベートでやってくんないかね。せめて、メールとかさー」

呆氣にとられた片山先生が、そんなことを言っていたみたいだけど、全く俺の耳には届いていなかった。

25 遭遇

用事といってもそんなにあるわけじゃないから、この時間に帰るのは本当に久しぶり。

流石に冬だけあってもう日が翳ってきているけれど、それでもいつも帰る時間よりは明るい。

佳苗から逃げてきたとはいえ、いつもと違う状況に、何か浮き足立つものがある。

たまには駅近くの本屋さんに行ってみようか、とか。
少し離れたところの喫茶店、読書にはもってこいなんだよね、とか。

こたろーちゃんのことを考えていたくない、そう考えている時点でもう無駄なんだけど。

それでも今は、こたろーちゃん以外のことを考えていたかった。

幼馴染という言葉で、突き放したのは私。

幼馴染という言葉で、切り捨てられなかったのも私。

信じることができないくせに、嫌いになることはできない。

本当に、嫌になる。

正門を出て、駅方面へと曲がる。

そこは住宅街ではあるけれど、駅へと向かう通りに面しているだけあって人通りも少なくない。

学生の他にも、仕事帰りの社会人の姿もちらほらと見受けられた。

幼馴染でいいんだよ。

そう、こたろーちゃんに告げた。

精一杯の、ポーカーフェイスと共に。

貼り付けた笑みは、こたろーちゃんにどう映っただろう。

忘れたつもりだったのに。

諦めたはずだったのに。

残っていた欠片が、存在を主張する。

「……」

じっと、アスファルトに覆われた地面を見つめる。

ゆっくりと歩いているせいか、周りの人にぶつからない。

まあ、向こうが避けてくれているからなのかもしれないけれど。

左右交互に動かす、足。

ローファアのつま先が、ちらちらと視界を横切る。

昔は、随分と大人に見えた。

制服を着て、ローファアを履くその姿が。

私は同じ格好をして、こたろーちゃんの横に立つことはできなかったから。

セーラー服にスニーカー。

手には指定のスポーツバッグと革靴。

……年齢差に戸惑った。

こたろーちゃんが言った言葉を思い出して、ふるふると頭を振った時、肩に衝撃を受けて驚いて顔を上げた。

そこには、少し俯いて腕を抑える女性の姿。

しまったと内心叫んで、慌てて正面に回り込んだ。

「すみませんっ、ぼーっとしてて！」

がばっ、と頭を下げれば、”大丈夫”と告げられた。

「……ひなちゃん？」

告げられた、……その声に、体の動きが固まった。

女性特有の、高くて綺麗な声。

漂う、柔らかい甘い香り。

俯けた視界に映る、ストッキングに包まれたパンプスを履く細くてすらりとした両足。

恐る恐る顔を上げてみれば、ふわりとした髪を緩く纏めている大人の女性の姿。

その人は私を見ると、嬉しそうに微笑んだのだ。

「久しぶりね、ひなちゃん」

あの時と同じ、邪気のない素敵な笑顔で。

26 蛇足・遭遇・こたろー

外に出てみれば、すでに比奈は正門を左に曲がるどころだった。

自宅に行くには右に曲がるはずなのに、なんで左？ と些か不思議に思いながらも周りにおかしく思われない程度の速さで前に行く比奈を追う。

一心不乱に足元だけを見ながら歩く比奈を、周りは避けながら首を傾げて見送る。

そんな光景を目の当たりにして、やっぱり自分が比奈を苦しめてるのかなと思いついた。

片山先生の言うとおりだな、きつと。

生徒達の間では渾名で呼ばれていた、片山先生。

馬鹿にされて、呼ばれているわけじゃない。

むしろその逆。

とても慕われていたのだ、口と態度の悪さをひっくるめても。

俺が三年の時も、そうだった。

いきなり成績が下がり生活態度が崩れた俺を、何を言うでもなくじっと見ていた。

頼りねえと思ったけれどそうじゃなくて。

馬鹿な事をやっている、自分自身で気付かせるためだった。

それに気が付いたのは、卒業した後だったけど。

片山先生には、頭が上がらない。

やっと追いつけるかと思った時、下を向いて歩いていた比奈が歩行

者にぶつかってパツと顔を上げた。

顔色が変わるほど驚いて、がばつと頭を下げている。

……どここの怯えた子犬だ。

思わず笑いそうになってから、咳払いをして近づいた。

一緒に謝っておこう。

教師たる者、生徒を守らねば。

その生徒が比奈じゃなかったらという仮定はしないでくれたまへ、
皆の衆。

それはたぶん、想像通りだからね。

数歩の距離ですぐ後ろまで来た俺の耳に、懐かしい声が届いた。

「ひなちゃん、久しぶりね」

……なんで彼女が、比奈の名前を知ってたんだ？

26 蛇足・遭遇・こたろー（後書き）

だんだん、蛇足が蛇足じゃなくなってきた^^；
しばらく、短い話が続きます……予定です。

27 過去のひと イマノヒト

「ひなちゃん、でしょ？」

目の前の人は、ふわふわと笑う。
あの頃と同じ、綺麗な表情で。

「あ……」

まともな反応を返すこともできずに、鞆を胸元に両手で抱えたまま
立ち尽くしてしまった。

何か、何か言わなきゃ……

そう考えれば考えるほど、何も言葉が出てこない。
口の中がカラカラになっていく。

「ひなちゃん？」

「三嶋さん」

「……！」

彼女の声と、重なった声に肩がびくりとはねた。

顔を上げて振り向けば、近づいてくるこたろーちゃんの姿。
思わず肩の力が抜けた。

「こた……」

「小太郎じゃない。やだ、久しぶり！」

ふわりと、目の前を横切る影。
一瞬の後、私が安心感を覚えたその場所に、彼女は立っていた。
さり気なく、その手をこたろーちゃんの腕に触れさせながら。

「茅乃、久しぶり」

にこりと笑う、こたろーちゃん。
それに嬉しそうに応える、彼女。

茅乃さんって、いうんだ。

初めて知った、彼女の名前。

あの時も、私の名前だけ、彼女は口にしていたから。

「茅乃、お前の職場、この近くなのか？ 確か住んでるのって近くじゃなかっただろ」

「んー？ ああ、引っ越したのよ。今の職場、カタセンが紹介してくれて」

「カタセン！ 懐かしいなその言い方、片山先生がきいたら嬉しくて泣くんじゃないか？」

「反対に、怒られそうだけど」

楽しそうに話す二人から、思わず目を逸らす。

決してそこに入り込めない、二人だけの雰囲気。

……ここに、いたくない。

見ているかわからないけれど、小さく頭を下げてくるりと踵を返した。

さつさところからいなくなろう。

邪魔って、あえて言葉で言われたくない。

「あ、ひ……、三嶋さん」

こつそりと立ち去ろうと思っていたのに、何を思ったかこたろーちゃん私が私を呼び止めた。

足を止めて、ぎゅ、と口を引き結ぶ。

無視したいけれど、それをすれば余計詮索されそうで嫌だ。

ゆるゆると振り返れば、茅乃さんが寄り添ったままのこたろーちゃん。

すると柔らかに微笑んだ茅乃さんが、くつとこたろーちゃんの袖口を引っ張った。

「やだ、ひなちゃんでもいいじゃない。幼馴染でしょ？」

「っていうか、お前、なんで比奈の事知ってるの？」

「ふふ、ナイシヨ」

また、二人の会話へと戻っていく。

……もう、行っていていいかな。

小さく息を吐き出して、失礼しますと声を掛けると私は駅へと駆け出した。

「あ、比奈！」

後ろから聞こえた声に、もう私は振り向かなかった。

28 蛇足・過去の人 イマノヒト・こたろー

「比奈……」

いきなり走り出した比奈を、流石に追いかけることはできなかった。いくら外でも、学校の真ん前。

まだ生徒もいる時間帯に、一生徒を教師が追いかけていたら確実に問題視される。

いや、比奈って呼んでる時点でどうなんだという感じなんだけど。

「ねえ、小太郎。あなたこそ、なんでスーツ着てここに？ 職場近いの？」

そつと袖を引かれて、傍らに立つ茅乃に目を向けた。

じつと俺を見上げてくる表情は、あの時のまま。

……あの時の、まま？

何か違和感を感じつつ、それが何かわからなくて首を傾げるだけにとどめた。

「ああ、俺も茅乃と一緒に。カタセンに教えてもらって、高校で臨時教師やってんだ」

「え、本当！？」

驚いたように笑みを零す茅乃に、そうだと提案した。

「カタセンに会ってく？ 今なら喫煙室にいるし」

「うん！」

嬉しい、と言葉を続けて歩き出す茅乃と高校へと戻りながら、走り去った比奈の後姿を人混みに探していた。

……見つけれなかったけど。

「あー？ お前、何拾ってきてんだよ」

片山先生は俺が飛び出して行った時のまま、喫煙室の定位置で煙草を銜えていた。

「酷い、カタセン！ 嬉しいでしょう？ 私が会いに来て、嬉しいよね？」

「マア、ウレシイ」

「棒読み！」

ぱちんと、カタセンの腕を叩く茅乃の姿に、こいつはこういう奴だったと内心納得した。

大人しそうな顔をして、結構スキンシップが多かったような。

つい腕を組んだまま二人を見ていたら、それに気づいたカタセンが片眉を上げて小さく首を傾げた。

「で、お前は幼馴染ちゃんに追いつけたのか」

「え？ あ、うん。追いついた。追いついたけど……」

ちらりと茅乃を見て、目を伏せる。

まさに逃げられた場面を見られていた奴目の前に、あんま喋りたくないんすけどー。

カタセンはそれだけで察したらしく、わざとらしく息を吐き出して肩を竦めた。

「お前さ、勤務中に目瞑ってやってんのに、他の女ナンパしてくんなよ。早く、仕事に戻れ」

「茅乃相手に、ナンパなんてするかよ。あー、でもまあ、仕事戻ります」

腕時計を見れば、ここを飛び出してから三十分は経ってる。

臨探の俺には二十分の休憩が認められているけど、もう超えてしまっていた。

「超過した分、大目に働いていきますんで。じゃーな、茅乃」

「あら、もういつちゃうの？」

寂しそうなその声にぴらぴらと手を振って、俺は比奈のいない図書室へと足を向けた。

.....

「ねえ、カタセン。小太郎、ひなちゃんの事好きなの？」

喫煙室に残された茅乃は、我関せずと煙草を吸い始めた片山にぼそりと呟いた。

その声はさっきまでとは違っていて、煙草を銜えたまま片山は視線を窓へと逸らす。

「そんなの、高三の時からわかってんだろ？ お前、まだ梶原の事諦めてないとかいうんじゃないぞ」

茅乃は、小太郎が一番最後に付き合った元彼女。

茅乃と別れてからは、比奈一直線で誰にも見向きしていない。

確か二人が別れた時、いざこざがあったとは記憶していないが。

茅乃は目を細めて小太郎の出で行ったドアを見つめると、口端を上げて笑みを浮かべた。

「さあ、どうかしら」

ほんわりとした無邪気な笑顔とは、全く合わない嫣然とした言葉口調。

「お前……」

「カタセン」

片山の言葉を遮るように、茅乃が声を上げた。

「ありがとう、小太郎を雇ってくれて」

それじゃ……と身を翻すと、茅乃はドアの向こうに消えた。

窓に目を遣ると、無表情のまま正門へと歩いていく茅乃の姿が街灯に照らされていた。

思わず、天井を仰ぐ。

「あーあ。梶原、なんちゅーもん拾ってきたんだよ」

別に俺が雇ったわけじゃねーし、と片山のぼやきが部屋に響いた。

28 蛇足・過去の人 イマノヒト・こたろー（後書き）

しばらく更新が滞ります。

お読み下さる皆様、大変申し訳ございません。

年内に、もう少し進めたいとは思っているのですが……

29 過去にならない記憶

「ただいま」

こたろーちゃんの声を振り切るように、早足で帰宅した私は全身汗が浮かんでいた。

それほど無意識に焦っていたし、精神的にも追いつめられていた。

怖い。

あの、悪意のない無邪気さが。

ぶるりと体を震わせて、思わず両腕で自分の体を抱きしめた。

それは汗が冷えて寒いからなのか、茅乃さんの存在からなのか、それともどちらのものでもあるのか。

「比奈？」

中々部屋に入ってこない私を心配したのか、母親がキッチンから声を掛けてきた。

その声にさえびくりと反応してしまつて、私は思いつきり頭を振る。

「今日の夕ご飯、何？」

なんとかいつも通りの声を作り出して、ローファーを脱ぎ捨てる。

「エビチリ。奈津が食べたいっていうから」

リビングキッチンまで、数歩の距離。

その間に、何とか自分を立て直した。

ドアをくぐれば、カウンターキッチンの向こうに母親の姿。

まだ下ごしらえの段階なのだろう。

海老の臭みを抜くための料理酒が、ふわっと香った。

「少し部屋に行ってもいい？ 読みたい本があつて」
テーブルの上にあつた急須からお茶をカップに注いで、それを手に取る。

母親の春香は頷きながら、納得した様に声を上げた。

「いつもより早く帰ってきたからどうしたのかと思つたけれど、そういう事ね」

どくり、と。

鼓動が、耳に響いた。

「うん、久しぶりに本屋に行きたくなつて。それで……」
言い訳のように口から出る言葉。

それが自分自身を追いかむように、重く響く。

「ゆつくりしてていいわよ、比奈がいても手伝いにならないしね」
ほわんとした声に、笑みを返して自分の部屋へと階段を上がつた。

ドアを閉めると机にお茶を置いて、そのままベッドに倒れこむ。

目を瞑れば暗闇が待っているわけじゃなく、さつきからずっと脳裡から離れない映像が再び浮かんだ。

こたろーちゃんの隣に寄り添う、茅乃さん。

ぎゅ、と目を瞑つた。

茅乃さんに会つたのは、こたろーちゃんが高校三年の時。

私が、中学校に上がった年の夏。

まだあの頃、私はこたろーちゃんの事が好きで。

だから、たまに見かける女の人と歩くこたろーちゃんを見るのが凄く嫌だった。

でも、中一と高三。

大人っぽいこたろーちゃんの彼女に、自分が勝てるわけがない。見るだけで、劣等感に苛まれた。

十三歳と十八歳。

どうしろと？

子供の頃のように、我儘に纏わりつくなんてできない。だって、その頃には気付いていたから。

こたろーちゃんは、今まで私と遊んでいたんじゃない。子供の私に付き合っ、遊んでくれていたんだもの。

それでも、好きで。

どうしたらいいのか、分からなくて。

「……ひな、ちゃん？」

そうやって自分の中でもややもやとしていた頃、声を掛けられた。

あれはシヨッピングモールの、本屋。

あまり行かないそこにたまたま友達の付き合いで行って、彼女と別れた後だった。

声を掛けられて見ていた本棚から顔を上げれば、ふわふわな髪を背に流した可愛いしいけれど確実に私より年上の女性の姿。知り合いでもないその人を、首を傾げて見つめた。

「ひなちゃん、でしょ？」

重ねて問われた言葉に、バカな私は頷いた。

「どちら様ですか？」

本当に知り合いだったとしたら、とても失礼な事を聞いているという罪悪感いっぱい。

彼女はふわりと笑うと、私を促す様に本屋から外に出た。

別についていくこともなかったのに、意味が分からなくて、状況についていけなくて。

促されるまま、馬鹿正直に後ろをついていった。

少し歩いてベンチのある場所につくと、彼女はなんの躊躇もなくそこに座り私を見上げた。

「小太郎の幼馴染って、ひなちゃん、あなたでしょ？」

「……こたろーちゃん？」

名前を呼ばれたり、いきなり連れてこられたり。

脳内がパニックになっていた私は、ただ彼女の言葉を聞くしかできなかった。

彼女は私の言葉を聞いて、くすりと笑う。

「こたろーちゃん、ね。そう、こたろーちゃんの幼馴染、やっぱりあなたね。一度見ただけだったから少し自信がなくて」

ふふ、と笑みを浮かべた彼女からは、なんの敵意も感じられない。

「会いたかったのよ、一度。あの小太郎が大切にしてる、幼馴染ちゃんにね」

「私、に？」

大切にされてるかどうかは置いておいて、幼馴染は確かに私だ。

ここまで聞いた時、私はその場から逃げだせばよかったのだ。けれど今までこたろーちゃんの事で何か言われたことがなかったか

ら、逃げるといふ事が思いつかなかった。

思えば、こたろーちゃん私は私がいそうなところで、デートというものをしなかったのだろう。

こたろーちゃんが女の人と歩いているのを見かけたのは、悉く私が寄り付かないような場所だった。

たまたま用事でその場にいたとか、そういう偶然だけだった。

だから何か言われることがなかったし、相手の女の人も私の顔を認識していなかったと思う。

それに。

ふ、と。彼女の顔を見る。

ふわりとした雰囲気その人は、にこにこ私を見ていて。

全く、敵意が感じられなかったから。

だから、まさか。

そんなことを言われると思わなかったのだ。

「小太郎、今日ね。ここにね」

彼女の指が、自身の首筋をすつと指さす。

「痕、あるかもしれないけど」

「？」

「あまり、からかわないでいてあげてね？」

「あと？　ですか」

彼女の言っている意味が、唐突すぎてよく分からなかった。
聞き返すと、彼女はふわり、と笑みを浮かべた。

「言ってる意味、分かるかしら？」

「……え、と？」

本当にわからなくて、問い返す。

すると彼女はベンチから立ち上がって、私を見下ろした。けれど威圧感も何もなく、ただあのふわふわとした笑みを浮かべたまま。

「私が、小太郎のものってこと」

「え？」

そこで、やっと意味が掴めた。

首筋。痕。

小太郎の、こたろーちゃんのもの。

頬が一気に熱くなっていく。それは羞恥心と嫉妬心、すべて合わせたような。

するり、と頬をなぜられて慌てて一歩後ずさった。

彼女はその手を下しながら、ゆったりと微笑んだのだ。その微笑みと全く合わない、静かな声音で。

「本当に、ひな、ね」

ヒナ。

自分の名前に込められた本来の意味ではない、その響きに。私はその場を逃げ出した。

さつき、茅乃さんとこたろーちゃんのもとから逃げた様に。

29 過去にならない記憶（後書き）

こんにちは、篠宮です。

さつぷいですね><

寒い！きゅー

幼馴染、更新しました。

一応、過去に何があったかだけはかきおえたいと思ひまして^^；
今年の更新は、今日が最後となります。

一月上旬、更新を再開する予定です。

これから、なんちゃって長男の嫁的年末年始が始まります。

早いなあ、一年で↑遠い目

それでは皆様、早いのですが、一年間ありがとうございました！
来年もよろしく願ひいたします。

篠宮 楓

30 蛇足・過去にならない記憶・こたろー

「まあ、こんなもんか」

伊藤先生が作った資料と各担当教師から出ている要望書を確認しながら、最終的なリストを作り終えた。

もう一度各教師と話し合ってから、購入するべく今度は納品業者と納期の段取りをつけて。

それから、図書室の模様替えだな。

自分に残された期間を脳裡に浮かべながら、段取りを大体決める。

残り、三か月か。

ふう、とため息をついてノートパソコンを閉じた。

図書委員もすでに帰宅した図書室は、不気味なほど静まり返っている。

いつもなら最終下校時刻まで粘る比奈も、今日は帰宅済み。しかも、いやゝな感じ満載で。

「口、聞いてくれっかなあ……」

思わず弱音はいちやうよ、俺。

高三の頃だって、ここまで比奈と話さないことなんてなかったし。

そこまで考えてから、頭を横に振った。

一度だけ、一週間近く避けられたことがあったつけ。

さっき会った茅乃の事を思い出して、脳裡を掠める。

茅乃と付き合ってた頃、いきなり一週間、声を掛けても何しても無視されたことがあったよ。
そういえば。

あれ、今でも理由がわかんないんだけど、一体なんだっただろ。

ぎしり、と音をさせて椅子の背もたれに体重をかける。

あの後すぐ比奈が男と歩いてるの見て、自分の中で決めただよな。
好きでいる事から、目を逸らすのはやめようって。
で、茅乃ともすぐに別れたんだっけ。

「つーか、ホント俺ってば最低」

茅乃にも悪い事したよなあ。

別れを告げた時、すんごい泣かれたんだっけ。

でもそれでも俺は比奈の事が好きだから、土下座の勢いで謝り倒したんだよな。

最後は一応、納得してくれて……。

大きく息を吐き出して、両手で顔を覆った。

そろそろ比奈切れなんだけど、マジでやばいんだけど。
声、聞きてえなあ。手、握りてえなあ。抱きしめ……

「声でてますよ、変態教師」

「――！？」

びつくーつつ！ と、文字通り飛び上がった。

自分の世界に旅立っていたからか、心臓がばくばくと鼓動を早める。声のした方に顔を向ければ、見慣れた顔がそこにあった。

「か、河田副委員長、まだ帰ってなかったの」

上ずりそうな声を抑えつつそう問いかけると、河田は鞆を少し持ち上げた。

「もう帰りますよ。少し、梶原先生に用があつて」

「……私に？」

聞き返すと、はい、と満面の笑みを浮かべられた。

「へたれのこたろーちゃんに」

……とうとう、生徒にまで言われるのか。俺は。

河田は机の上に鞆を置くと、そのまま座りもせずに静かに口火を切った。

「うちの委員長、今日、放課後図書室に残りませんでしたねえ」

「……そうだね」

何が言いたい。というか、何か聞いているのか、比奈から！

硬直状態の現状が少しでも動き出すのかと、思わず強張る。

動いてほしいけど、一刀両断振られたらヤバイ。

とりあえず、臨時教師はやめないと。

カタセンに迷惑かける。

え、どういう風につて？

うーん、我慢できるかどうかわかんないから。

「授業終わった後、来たことは来たんですよ。ここに」

「？ そうなんだ」

図書室来たのに、帰ったって事か？

「梶原先生と比奈の間がすつこいぎくしゃく違和感満載だったので、突っ込んだら逃げられました」

さらりと言った言葉に、思わず頭を抱えなくなった。

……頼むよ、追い打ちかけないでくれよ。

自分が大元の原因だっという事を棚の一番上にあげて、河田の声に天井を仰いだ。

比奈が早く帰ったの、こういう事か。

それなのに俺が追いかけて行っただから、余計逃げたと……。

上を向いた顔を戻して、目の前に立つ河田を見上げた。

「何処まで比奈から聞いているかわからないけど……」

「まったくなにもこれっぽっちも、委員長から聞いてませんよ」

「へ？」

「まったくなにもこれっぽっちも聞いていませんけど、普段の梶原先生見てればどう考えてもヘタレでおバカなのは先生の方だっただけよく分かります」

……

怒っていい？

流石の先生もね、聖人君子みたいなもんじゃなくてだね、怒るという事もできる人間なのだよ？

微笑み常備の表情が流石に引きつり始めた俺の顔を、河田が見下すように目を細めた。

「大体、比奈が梶原先生との関係を懸命に隠しているのに、それをずかずかと蹴散らして親しげオーラだしてりや、周りの女が比奈に對してどういった態度に出るかくらい、文系教師的脳内板書で思いつかないんですか？」

よどみなく言い切られた言葉に、思わずあんどりと口を開けてしまった。

なんだ、文系教師的脳内板書って。

「しかもさっきの女の人、なんですか？ 比奈に言い寄りながら他の女連れて校内歩くとか、その脳味噌は文字通り味噌ですか。いや、失礼ですよね、味噌に」

味噌にかよ！

……と、内心突っ込みを入れているけれど、全く口から出ないのは河田の勢いに押されているから。

それ以上に、言っていることが……事実だから。

「でも、特に構内を練り歩いたわけでは……。それに、茅乃は高校の時の同級生だし」

「へえ？」 かやの ”、ですか」

言い返した言葉は、言い聞かせるような言葉となって自分に返ってきた。

「まあ、なんていうんですか？ はっきり言って梶原先生がヘタレだろうが脳味噌過熟成だろうが下半身のみに忠実だろうが、私にはどうだっていいことなんですけどね？」

……女子高生が言う言葉か……！

「大人の男」のこたろーちゃんにはわかんないかもしれませんが、
ど、”女の子”の私達から言えば、親しげ名前呼びはアウトです」

「は？」

そこまで俺を貶しといて、名前呼びに突っ込み？

間抜けな顔をさらしたであろう俺を、河田は汚いものでも見るように嫌そうに眉間にしわを寄せた。

「くだらないって、思ったでしょう？ それ位くだらないことでも、女の子にとってはくだらないんですよ」

「え、名前呼ぶだけで？」

「そうです。でも、梶原先生、全く気付かなかったでしょ？ 同じように先生が気が付かないことで、比奈を傷つけてることがあるんです」

思わず、身を乗り出した。

その言い方って、それって……！

河田は俺が言いたいことに気が付いたのか、鼻で笑った。

「言いましたよね？ 何も聞いてませんって。でも、比奈はすごく傷ついてる。見て、分からないんですか？」

高ぶった感情が、一瞬にして冷める。

見て、分からないかって……

「分かってるよ。でも、どっちかっていうと俺の方が落ち込みたい状況なんだけど」

「勝手に落ち込め、ヘタレ野郎」

……さすがに、怒っていいかな？

「じゃ、私帰りますので。鍵よろしくお願いします」

引きつった口を開こうとした俺を一瞥して、河田は踵を返すと図書室を出て行った。

開けたままの口を晒している、俺を置いて。

31 委縮するココロ

「……」

うつすらと目を開ければ、いつもと変わらない天井が見えた。幾度か瞬きをして、周囲を見渡す。

ああ、寝ちゃったんだ……。

真つ暗な部屋に、窓からぼんやりと光が差し込んでいた。

「……こたろーちゃん、帰ってるんだ」

窓の横は、こたろーちゃんの部屋についているベランダに面している。

そこから漏れてくる明りに、こたろーちゃんの在宅を知った。

ぎゅっと両目を瞑って、大きく息を吐き出す。

暖房もつけないままにいた私の部屋はとても寒くて、ぶるりと身を震わせて上半身を起こした。

机の上の時計は九時過ぎを指していて、寝すぎたな……ともう一度溜息をついた。

最近、あまり寝れてなかったから。

今日は茅乃さんの事もあって、パンクしちゃったかな。頭が痛いのは、知恵熱？

思わず、くすりと笑う。

こたろーちゃんを幼馴染としてみるって、決めたのに。茅乃さんの存在に、感情を左右される。

いくら過去の事があるからって、やっぱり、認めなきゃだめなのかな。

「……まだ、こたろーちゃんのことを、好きだ……って」

言葉に出してみれば、ストンと心に当てはまる。分かつてる。

本当は、ちゃんと自分の心なんて分かつてる。

一生懸命目を逸らして、幼馴染としてみようとしているだけ。

「だつて……」

信じられないんだもの。

いくら好きだと言われても、私が信じられないんだもの。

高三の時、私を好きだと言いだめたのは。

私が茅乃さんに会って、一か月も経っていなかった。

あの日、茅乃さんが言った通り、こたろーちゃんの首筋には鮮やかな赤い印がついていた。

言われなければ、気付かなかったけれど。

気付かせるために、あえて私に伝えたのだろうくらい分かる。

その位、深い仲だった二人が。

数週間も経たず、別れた。

私には、全く理解できなかった。

二人の事も。

すぐに、私を好きだと告げたこたろーちゃんの事も。

ずっと私を好きで悩んでいたと言っていた、こたろーちゃん。なら、どうして他の人と……

起こしていた上半身を壁にもたせて、足を投げ出す。
ひやりとした空気が足を撫でるけれど、布団もかけずじっと見つめる。

もし頷いて恋人になって、すぐにいらないうて言われたら？
あんなに大人で、あんなに綺麗で、今時の格好をしていた同級生が
駄目なのに私がずっとそばにいられるなんてことあるの？

そんな事言うわけないって、こたろーちゃんはそういう人じゃない
って分かってても、信じきれなかった。

幼馴染さえ壊れてしまう状態に、足を踏み出せなかった――

窓に目を向ければ、煌々と明りの灯るこたろーちゃんの部屋。
本を読んでいるのか、仕事をしているのか、それとも転寝中か。

「ねえ、こたろーちゃん……」

どうしてごめんって言いながら、全部話すって言いながら、都合の
悪いところは秘密なの？

全部じゃないよ、それ。

なのに、信じてって私に言う。

大きく息を吐いて、ずりずりと壁をずり下がる。
ぱすりと枕に頭を沈めると、振動で目尻から涙が零れた。

「好きなのに、信じられない私が……おかしいのかな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4863y/>

幼馴染と図書室

2012年1月13日00時59分発行